

ISSN 0024-3914

言語研究

別冊

1988年12月

日本語学会50年の歩み

日本語学会発行



目 次

歴代会長（1938～1988）と就任講演	2
日本言語学会創立50周年を祝して	3
祝 辞	6
祝 辞	9
祝 辞	12
祝 辞	13
日本言語学会創立50周年におもうこと	14
日本言語学会の将来に向けて	16
思い出すまま——三題	18
思いだすまにまに	21
言語学会と私	23
言語学入門したころ	24
学会創立50周年によせて	27
思い出すことども	31
『言語研究』が出なかった時代	33
一老学徒の回顧	35
昭和10年代の頃	37
日本言語学会とのかかわり	39
第1回大会の思い出	43
ベルリン時代の思い出と G. J. Ramstedt の手紙	45
東海道誌	52
Congratulatory Addresses from :	
Bahner, Werner (Berlin, DDR)	55
Dressler, Wolfgang U. (Wien)	56
Gamkrelidze, Thomas V. (Tbilisi)	57
Haugen, Einar (Harvard)	58
Martinet, André (Paris)	60
Robins, R. H. (London)	61
Uhlenbeck, E. M. (Leiden)	62
日本言語学会（1938-1988）略年譜	63
『言語研究』創刊号 抜粋 リプリント	76

歴代会長（1938～1988）と就任講演

1938～1967	新村 出
1967～1971	金田一京助
1971～1972年度	高津春繁 [interregnum 委員長]
1973～1974年度	柴田 武 ["]
1975～1976年度	服部四郎「古い言語学と新しい言語学」
1977～1978年度	泉井久之助「双数について」
1979～1980年度	西田龍雄「チベット・ビルマ諸語と言語学」
1981～1982年度	川本茂雄「言語学と記号学」
1983～1984年度	井上和子「文-文法と談話文法の接点」
1985～1987年度	国広哲弥「認知と言語表現」
1988～(1990)年度	小泉 保「空間と時間における直示の体系」

追悼号 『言語研究』 第16号 (1950. 8.)	小倉進平
『言語研究』 第54号 (1969. 1.)	新村 出
『言語研究』 第62号 (1972. 12.)	金田一京助
『言語研究』 第64号 (1973. 11.)	高津春繁
『言語研究』 第84号 (1983. 11.)	泉井久之助
『言語研究』 第85号 (1984. 3.)	川本茂雄

主 要 事 業

1938～1988	『言語研究』(Journal of the Linguistic Society of Japan) の刊行, 大会(講演会・一般研究発表会)の開催。
1982	第13回国際言語学会会議を主催。会長 服部四郎, 事務総長 井上和子両氏, ほか, 日本言語学会の多数の会員が組織委員会および後援会のメンバーとして貢献。なお, 1983年12月 Proceedings of the XIIIth International Congress of Linguists, Tokyo, 1982. pp. Lxii+1, 453. 25,000 円。800部を印刷刊行。

日本言語学会創立 50 周年を祝して

日本言語学会会長 小泉 保

言語の起源は人類の誕生にまで遡るのかもしれないが、言語に対する科学的研究が始まったのはごく最近のことである。研究団体として「パリ言語学会」が創立されたのが 1866 年で、今から 122 年前のことである。日本では、1886 年（明治 19 年）に東京帝国大学に博言学科が設置され、1899 年（明治 32 年）に言語学科と改称された。

アメリカ言語学会が結成されたのが 1924 年、それより 14 年遅れて 1938 年（昭和 13 年）に「日本言語学会」が設立された。この年、国家総動員法が公布され、戦争の遂行に必要な人的・物的資源が政府により統制されることとなった。ようやく生活必需品の不足が目立ち、木炭バスが走り出した。かくて、加速しながら、太平洋戦争に突入していくのである。

私が東京大学に入学したのは終戦後の昭和 22 年のことで、お茶の水から本郷までの焼け跡にはバラックが立ち並んでいた。軍国主義から民主主義への切り換え、“忠臣”楠正成が抹殺され、“逆賊”足利尊氏が復権するなど、思想上の逆転に国民は人生の目標を完全に見失っていた。

私は英独仏以外の言語を学ぼうと志して、言語学科に籍を置いたが、日本は貧困の極にあった。服部四郎先生の言語学演習では、Bloomfield の Language をタイプに打ち、これをワラ半紙に謄写したものをテキストとして用いた。高津春繁先生のギリシャ語は Platon の Symposion を一頁ずつ写真で焼きましましたものを使って読み合わせした。私は父親が死亡したため卒業を一年遅らせ、昭和 26 年に学窓を去ったが、神田盾夫先生の卒業生への送別の辞には「君たちは本が買えなくて気の毒だった」という慰めのお言葉があった。

当時、新本の洋書が買えるわけではないし、留学の望みもなく、学問的に隔離状態にあって、いわば牢獄の中での研究であった。私はフィンランド語を専攻言語に選んだが、この学習が何の意味をもつのか予測が全くつかなかった。

やがて日本の言語学界は、戦前のプラグ学派の理論から切り離され、アメリ

カ構造主義の理論に頭まで潰かり、次いで生成文法へと流されてきた。

ここで、日本言語学会運営の歴史を顧みれば、初代会長新村出先生（昭和13～42年）から金田一京助先生（昭和42～46年）に引き継がれたが、その後、委員長制に切り換えられ、高津春繁先生が昭和46・47年度、次いで、柴田武先生が昭和48・49年度、その任に当たられた。

その後、言語学会の組織は改革され、会長・編集委員長・会計監査委員・常任委員・委員を全会員が直接選出する民主化路線に則ることとなり、会長の任期は2年で、再選を認めないという基本骨子が定められた。

かくて、新制度による会長は、服部四郎先生（昭和50・51年度）に始まり、泉井久之助先生（昭和52・53年度）、西田龍雄先生（昭和54・55年度）、川本茂雄先生（昭和56・57年度）、井上和子先生（昭和58・59年度）と順次代わってきた。

さらに、制度の手直しがあり、会長の任期を3年とし、常任委員と編集委員を会長と編集委員長がそれぞれ委嘱する形に改められた。この方式により、国広哲弥先生が昭和60・61・62年度の会長を担当された。

こうした歴代会長の学殖とご人徳により、また、会員の熱意と学術的前進に支えられて、日本言語学会は隆昌の一途をたどってきた。現在、全会員1,270（昭和63年7月）を擁するにいたった。

その間、特記すべきは、東京で開催された第13回国際言語学会議である。服部四郎先生の肝いりで国際会議を日本に招来する提案がなされたが、昭和55年度の第2回言語学会委員会は、こうした大規模な会議の運営に対する不安と経済的な懸念から、受入れについて躊躇する向きもあった。しかし、日本の国際的信用にもかかわることであるから、思い切って開催した方がよいという声が強くなり、日本言語学会の主催案が採択された。1982年（昭和57年）に東京で開催された第13回国際言語学会議は、参加者が1,338人（うち、海外320人）にも及び、大成功をおさめた。これにより、日本言語学会は国際化への通過儀礼を見事に済ませたことになった。

戦争末期、「み民われ、生ける 駿（しるし）あり、天地（あめつち）の 榮ゆる 時にあへらく思へば」（海犬養宿福岡麻呂『万葉集』6巻996）を歌われた。国が栄える時に生まれ合わせて生き甲斐があるという主旨であるが、下駄ばきにゲ

ートルを巻いた中学生には実感がなく、そらぞらしく聞こえた。当時、日本は破滅寸前の状態であった。

しかし、戦後、目覚ましい経済成長を遂げて、有史以来最高の繁栄を享受している現今の日本においてこそ、上記の歌は素直に唱和できるように思える。

現在、書店には和洋の書籍が山と積まれ、海外での研修も自在である。言語学も理論を中心に、社会言語学、心理言語学などの支脈に分派しながら、コンピューターとも結びつき、多彩な展開を遂げ、まさに全盛期を迎えている。私も、言語学の道を歩みつづけてきたことを誇りとしている。

いま、日本言語学会 創立 50 周年を祝賀するにあたり、この半世紀の間に、戦争に耐え、社会的変動をくぐり抜けて、質的に向上し、量的に拡大されてきた言語研究の現状についても、「生ける験あり」と謳歌できる心境にある。若き研究者が、この伝統を受け継いで、言語学をさらに進展させられんことを切望する。

祝 辞¹⁾

服 部 四 郎

日本言語学会創立50周年に当たり、過ぎし事どもを回顧しつつ、一言お祝いの言葉を述べさせて頂きたいと存じます。

50年というと半世紀ですから、決して短い年月ではありません。それにもかかわらず、振りかえって見ますと、創立当時のことが、私にはまるで数日前のことのように思い出されます。それは、日本言語学会が創立されても当然のように思われる活気のある時代だったと思います。私はその喜びの中で、ふと恩師藤岡勝二先生のことを思い出しました。藤岡先生は、明治38年に東京帝国大学文科大学の言語学講座担任の助教授に任ぜられ、同43年には教授に昇任、昭和8年3月に定年退官なさるまで、終始一貫言語学科の主任教授として活躍なすった方ですが、まことに残念なことに、昭和10年2月に過労のため62歳でお亡くなりになりました。日本の「言語学ことはじめ」に当たられたような方だと私は思います。昭和13年に日本言語学会が創立されたとき、ご存命であられたら、どれほどお喜びになられたらろうかと思ったことが、はっきりと思い出されます。

この50年間には、第二次世界大戦があり、学会もその大きい影響を受けました。機関誌『言語研究』の第12号は昭和18年3月に発行されていますが、第13号の発行は同24年6月で、6年以上休刊になっています。また、そのころの同誌の現物についてご覧になれば、紙質・印刷などにこの大戦の反映を見ることができます。それは誠にきびしい年月でした。それにもかかわらず、学会は力強い活動を続けて止まなかったことを、幸いにも私はこの眼で見ることができたのであります。

日本言語学会は、創立以来、事務局は東京帝国大学の言語学研究室にありましたが、会長は京都帝国大学教授の新村出先生にお願いして参りました。先生が昭和42年8月にお亡くなりになりました折には、副会長の金田一京助先生に会長を

1) 1988年10月22日(土)神戸市外国語大学で開催の日本言語学会創立50周年記念式典における祝辞。

お願いすることになりました。ところが、金田一先生が昭和46年11月にお亡くなりになりました時には、副会長がなく、会長を決めるべき規則もありませんでした。

そこで、学会の将来を思う人々は、委員会と連絡をとりつつ、たびたび制度検討委員会を開き、3年もかかって一つの制度改革案を作成しましたところ、この案は、昭和49年10月12日に開かれた同年度の第5回委員会で可決されました。これが学会の“憲法”ともいうべき「新会則」であります。それは、色々の詳しい規則によって、少数の人々が学会を独り占めできないように規定しています。中でも注意すべき点は、「会長は、個人会員の互選による。任期は2年とし、就任は1回に限る。」としている点で、会長が個人会員の互選で決まる例は、恐らく外国には無いのではないのでしょうか。これで、真の意味で「日本言語学会」となったと思います。

その後、この会則は、運用上の経験から修正が加えられ、より良いものとなり、会長の任期も前会長の時から3年となりましたが、“憲法”の精神は不変であります。

また、幸運なことに、数年まえから三省堂出版局に学会の事務局を永続的に置けることになり、会務の一部を日本学会事務センターに委嘱できるようになりました。これで、どなたが会長になられても会務が遂行できるようになりました。そして、今明日のような盛大な50周年記念の大会が開かれるようになりました。

しかし、「新会則」成立以来今日に到るまで、14年を要しております。何事も一日にして成らずの感を深くします。

今日の佳き機会に、過ぎし日々を顧みつつ、一言祝辞を述べさせて頂いた次第であります。

* * *

「記念講演」の直前に朗読した「祝辞」の原稿は紛失し——後に発見されたけれども——新たに執筆しましたので、多少詳しくなりました。

なお、藤岡勝二先生のことは、小生編の『言語学ことはじめ』(昭和59年10月

30日発行、私家版。東京都千代田区西神田2-8-10の日本書房に販売を委託)に詳しく述べました。ただし、p. 65, 1.2の「金時計」は「銀時計」の誤りで、p. 59の大正12年度の「言語学概論」のご講義は、藤岡先生が同年4月から同年末まで欧米各国に出張していらっしゃいました(p. 64参照)ので、八杉貞利先生が代講をなすはずだと、杉捷夫氏からご教示いただきました。なお、p.25, 1. 12に、

「仏文科の学生は言語学概論を聴くな」

と言われたというのです。

と書きましたが、これに対しても、杉氏から事實は次のようだというお手紙を頂きました。

「フランス語史」の講義があるというので研究室へ申込みに参りましたら、だめだと言い渡されたもので、それも先生直接ではなく、助手の方が副手の人に言われたことだったように思います。

私は、杉氏のお話と別の事件とを混同して書いたものと思います。お手紙によって、ここに訂正させていただきます。

祝 辞

日本音声学会会長 平 山 輝 男

日本言語学会は、昭和13（1938）年に発足し、今年50周年を迎えた。創立以来今日まで、堅実に運営されてきたのである。人生50年を祝って“50の賀”を催す風習があったことが古典にも記録されているが、地味な学者の研究学会が50年も続き、しかも時代と共に会則も改善され、研究も着実に発展していることは、誠に喜ばしいことである。

日本言語学会の初代会長は新村出博士だった。同博士はまた、大正15（1926）年に発足した日本音声学会（当初の名称は音声学協会）の上田万年初代会長の跡を承けて、第2代の音声学会会長でもあったから、一時上記2学会の会長を兼ねておられたわけである。

会長のほか主な役員も両学会のを兼ねていた学者が多かった。

そのうえ随時開かれた研究会も当時は両学会共に東大の構内で行なわれていたから、その研究会にできるだけ出席していた私にとっては、今、40数年以前を振り返ってみても、どちらの研究会がどうであったのかあまり定かでなくらい両学会は親しい関係にあったようだ。

また、柳田国男氏を初代会長とし、東條操氏等を幹事として発足した日本方言学会（終戦後中断）も、そのころの創立であって、これもたいへん親しみを感じた学会であったから、記憶の整理に混乱をきたす。学会の模様を詳細に記録していた日誌の類も、昭和20（1945）年の戦禍に会って、多くの書籍や印刷過程にあった原稿（『日本語音調論』富山房書店）と共にすべて焼失してしまったので、その当時の学会模様を確認するよすがもない。

誤りをおかすかも知れないことを恐れるが、下宮編集委員長の求めに応じて、記憶をたどって当時の感想を述べることにする。

橋本進吉博士の念願によって創立された国語学会も、日本言語学会より6年若し発足（1944年）であるが、これも同じ言語研究にかかわる全国的学会仲間とし

て日本言語学会や日本音声学会・日本方言学会の研究会と共に、有益な研究上の刺激を受けた。

私は以上の諸学会の研究会並びに出版物の学究上の恩恵を受けることが大きかったので、それぞれの研究会には楽しく参加し、また自ら発表する機会もあった。

そして各学会の会長や役員の風ぼうに接し、また、学会員とたがいに意見の交換ができたことは若き日の楽しい思い出である。

また、新村会長をはじめ、柳田国男・橋本進吉・金田一京助・市河三喜・小倉新平・伊波普猷・東條操のほか多くの先学から、心やすく声をかけられ、激励のことばと学究上の指導を受けられたことは、とくに嬉しく、帰宅してからも興奮さめやらぬ場合もあったことを思い出す。

これらの先学をはじめ、先輩知友のかなりの方が日本言語学会・日本音声学会・日本方言学会等の役員や会員を兼ねておられたので、どの学会のどの研究会で、どうであったのか、特殊な場合（創立記念公開講演会や私自身の研究発表をした場合等）を除いては、その研究会を行なった学会や日時について確実を期しがたいくらいである。

しかし、きわめてあざやかな印象は、上記の4学会が、たがいに仲むつまじく助けあって運営されていたということである。

当時若年の平会員であった私が、高年の学会幹部の内部事情を知る由もないと無視されるかも知れないが、幼児でも両親たがいの心情関係を肌で感じると言われていることを思えば、かなり信ぴょう性の高いものであろう。

言語研究関係の各学会が、相互に助け合いながら、研究を進めている中で当時青年学究であった私は、同じ若い学究仲間の金田一春彦・島田勇雄・知里真志保・林大・山脇甚兵衛等の諸氏と研究問題を話し合えたことは楽しい思い出である。

時代が移るにつれて、それぞれの学会の会長や役員も変り、各学会それぞれの方針や研究分野も専門化して、周辺を振りかえる余裕も無くなり、たがいに疎遠になるかに見えるが、これは日本の言語研究の総合的発展のために残念である。

私はそのような学界評を聞き始めたころから、何とかして、これを是正したいものだと思っていた。学会同士が助けあって、せっさたくまの環境作りをし、日本の言語研究が世界の言語研究の発展に対応し、21世紀に向けて、いよいよ進展

するよう祈りたいものである。

後に日本言語学会の会長となり、かなり厳しい会則の改訂を実施して、学会運営の新機軸を示した服部四郎博士も、有坂音韻論を打ち立てて後、惜しくも夭折した有坂秀世博士も、その若い時期に、日本音声学会の会報や季刊『音声の研究』に有益な論文を寄せ、学界に強い刺激を与えた。

また、初期とは言えないが、昭和35（1960）年に高輪プリンスホテルで催された日本音声学会の第1回世界音声学会会議では、服部博士も私と一緒に日本音声学会の理事として協力され、共に研究発表もし、更に外国の学者を京都・大阪・奈良へ案内もした楽しい思い出がある。

また、同博士が昭和57（1982）年、第13回国際言語学会会議を、日本都市センターで催された場合は、私はかつての恩誼に対しても、また当時国語学会の代表理事であった立場からも積極的に協力（アドバイザー・コミッティ）した。この時は、東洋では初めてという第13回国際言語学会会議を、日本に誘致した日本言語学会の世界的信頼とこの会議が極めて盛会であったことに対して、心から祝福した次第である。

最近、服部博士以下泉井久之助・西田龍雄・川本茂雄・井上和子・国広哲弥・小泉保氏がそれぞれ会長を引き継がれ、年2回の全国大会と、年2冊の機関誌『言語研究』が順調に発刊され、堅実な学会運営の軌道を歩いている。

現在、日本言語学会は、日本学術会議の語学文学関係学会（41の登録学会）に属し、国語学会・日本音声学会等と共に、その主要メンバーである。もちろん会員選出の母体であり、研連委員を出すことのほかに、文部省科学研究費の審査委員を、学術会議を通じて出すことにもなっている。

今、ここに日本言語学会が創立以来堅実な歩みを続けた50年を祝うと共に、これからの研究活動がますます活性化することを期待したい。

祝 辞

国語学会代表理事 築 島 裕

国語学会を代表して一言お祝いの言葉を申し上げます。

貴学会は1938年に設立され、今般めでたく50周年を迎えられました。この間、戦中・戦後の困難な時期を乗り越えて、今日に至るまで、日本全国については勿論、世界的規模の下に、言語学の研究の発展、会員相互の親睦のために、多大の貢献を果して来られました。この間の関係各位の御努力に対して、心からの敬意を表する次第であります。

当国語学会は、貴学会よりも数年後の設立であります。その研究分野の最も近い学会として、学术交流・運営その他諸方面に亘って、緊密な友誼的關係を継続して参りました。40数年の長期間に亘って、貴学会より頂いた御厚意、恩恵は、蓋し計り知れぬものがあり、会員一同、感謝に堪えぬところであります。

本日の記念式典に当り、衷心より祝賀の意を表しますと共に、今後益々の御発展を祈念し、倍旧の御厚誼をお願いして、祝辞といたします。

1988年10月22日

祝 辞

日本英語学会会長 長谷川 欣 佑

日本言語学会設立50周年に際し心からお祝い申し上げます。地味な言語研究の分野において、半世紀の長きにわたり、学問的水準を保ちつつ学会を運営することが、どんなに大変な偉業であるかは、後輩学会である私共からも容易に推察されるところであり、私共の模範として最大の敬意を表します。貴学会と英語学会は、個別言語の科学的研究とそれに基づく一般言語理論の構築という同一の目標をもっておりますので、今後一層交渉を密にし、互いに補完し、刺激し合い、斯学の発達に寄与いたしたく存じます。今後の貴学会の一層の御発展をお祈り申し上げます。

1988年10月8日

日本言語学会創立50周年におもうこと

池上 二良

昭和13年に創立された日本言語学会は、今年、50周年を迎えた。創立に当たっての会長は新村出先生、副会長は小倉進平先生であった。評議員には16名、幹事には5名の先生が名を連ねている。いくたの先駆的業績を打ち立ててこられたこれらの諸先生は、おひとりを除いて、すべて故人となられて今はないが、これらの方々によって創立された日本言語学会はすでに50年を経て、その歴史は日本の言語学の発展の歴史を表徴しているといえよう。学会誌の『言語研究』は、第1号が昭和14年1月に三省堂から発行された。

私事にわたるが、筆者は旧制松本高校二年生であったその年、松本の町でもあまり大きくない新本の書店のたなに、『言語研究』第1号の1冊が、単行本にまじっているのを偶然みつけた。それは、ページのふちを裁断してない瀟洒な感じの装丁であった。そのころ、言語に興味をいただいていたものの、言語学がどんなものかもわかっていなかったのに、ただ強くひかれ、その後、一二度行っては取り出し、とうとう買いもとめた。三省堂が読者にこの第1号について感想をもとめるはがきが、筆者のこの号には、いまもそのままはさんである。この雑誌で、言語学会というものを知り、会費を送金して入会申込みをしたところ、言語学会はこの高校生に第2号以降を送ってくれた。学校の旧制度の時代には、大学まへの少年が、自分の勉強のなかで夢をもってなにか好きなことをみつけるのんびりさがあったが、新制度での高校生は、その年ごろでしかもてない夢をもって、勉強のなかに好きなことをみつけてやってみることができるだろうか心配である。

また、私事にもどるが、その後、筆者は東大言語学科の大学院特別研究生になった昭和20年代、日本言語学会の幹事の一人として学会の雑用をお手伝いした。『言語研究』は、昭和18年第12号を発行したあと、戦争中で刊行ができず、24年に戦後はじめて第13号が活版印刷で発行されたが、戦後の事情により第14号から21号は謄写版印刷で刊行された。やっと第22・23合併号から活版印刷にもどり、

それを手にしたときはうれしかった。また、日本言語学会は、昭和26年から東京例会を企画して開催し、その世話をお手伝いした。その後、学会の委員として今日に至ったが、昭和20年代のことがとりわけ思い出深い。

さて、日本言語学会が設立されて50年。これを創立した諸先生は、おおよそほぼ明治20年代以降西洋の言語学に接して日本の言語学研究をすすめて来られたのであり、その学問業績の上に立って学会が創設されたのである。日本言語学会の50年間の上に、さらにそのまえの約50年を加えれば、日本の近代言語学の歴史となるといえよう。もちろん、それより以前の日本においても、明治前期の先学の業績があり、特に江戸時代には発達した言語研究があり、言語研究はなおさらに古くさかのぼることを見のがしてはならない。欧州の言語学史については贅言を要しないが、わが国の近代言語学は、その19世紀の歴史・比較言語学の大成期の成果をとり入れることではじまったといえよう。その間、時の推移とともに、言語に関する新しい諸事実の発見があり、またある事実の新しい解釈や解釈の新しい方法、ひろく新しい研究方法があらわれ、言語研究の進展、推移があったのである。今後もさらに、言語研究はそのようにして展開して行くことであろう。

ところで、研究者は、同時代の言語研究の立つ位置を見定めていることが、研究上もつねに大切であろう。

なお、たまたまみたアメリカの人類学者 A. L. Kroeber の古典的な人類学概論 *Anthropology* (改訂版 1948 年) の文化変化の章に、人間の文化にはあらゆる領域に流行 (fashion) ということがあることが述べられている。例の一つとして学問、特に新しい学問が流行の波をうけることにふれて、自分の扱っていることをよく見通している学者というもののはつぎのことを知るとし、学問の領域でもさまざまな考えや方法が流行しては消えて行くことを、またかれの仕事の一部は一時のはやりと永遠の進歩を区別することであることを記している。

研究における自分の立場をみつめ、あるいは、それに関連して、Kroeber のような研究における真の進歩とはなにかを考えると、過去の日本の言語研究の歴史、さらに大きく世界の言語学史を顧みることは、大いに役立つだろう。言語研究史に目をむけることは大切である。日本言語学会50周年に当り、このことをおもう。

日本言語学会の将来に向けて

井上 和子

日本言語学会についてもっとも印象に残っているのは、1982年に東京で開催された第13回国際言語学者会議のことである。5年後の昨年ベルリンで開かれた第14回の会議を経験して、東京でのこの会議の記憶が新しい意味を持ってよみがえってきた。

東京でこの国際会議を開くについては、事前には多くの困難が予想された。財政問題が最も大きな荷物であったが、これは各方面からの協力や、最終段階で予想以上に多数の日本の学者や学生の参加を得て、無事に解決した。またこの会議はアジアで初めて開かれたので、経費の面から欧米からの参加者は少ないだろうと予想された。そして予想どおり全参加者約1400名のうち、欧米からは350名から400名の参加者に留まり、特に東欧諸国からの申し込み者で出席できない人々が少なくなかった。昨年のベルリン会議には東欧諸国からの参加者が多く、東京会議とは対照的であった。参加者数も過去最高であったと聞いている。

国家の行事であったベルリン会議と、服部四郎会長のもとに集まった主として言語学会会員からなる民間グループが運営した東京会議とでは、種々の面で違いがはっきりしていた。ベルリン会議では会議の前のレセプションも、会議中の晩餐会も非常に豪華なものであったし、慣例に反して晩餐会にも会費を徴収しなかった。会議場もパレスと呼ばれる国家的行事を行う大会議場であった。それなのに言語学者国際常置委員会事務総長のユーレンバック博士が、別れぎわに私に東京会議での会議運営の方法を今後の開催国に伝えてほしいと言われた。お世辞とは取れない真剣な表情であった。

会長も事務総長もともにベルリン会議の成功に非常に満足しておられたので、最初はこの言葉の意味がよく分からなかった。これは「西側諸国ではすべてベルリンのように行くまいから、やはり参考になるのは東京会議の当事者の経験である」ということだったかもしれない。しかし私にはもう一つの意味があるよう

に思われた。それは、学会というような伝統的な行事においても、種々の点で日本は欧米諸国に非常に近くなり、互いに親近感を以てつき合えるようになっていくという感じである。東京会議ではちょっとした事務手続きにおいても、海外からの参加者に違和感を与えなかったのかも知れない。

このことは東京会議でもベルリン会議でも日本人参加者の中にはっきり見られた。東京会議では特別研究部会で日本の若い学者が外国人参加者とともに堂々と論戦に参加しているのに感心したものである。ベルリンでは日本人の研究発表が37篇を数えたと聞いている。家族づれの参加者も多かった。これは日本の経済事情のせいばかりではなく、学術研究において日本が真に「開かれた国」であることの一つの現れではなかろうか。このことを改めて認識し、これを守って行かなくてはならないと思ったことである。

今や言語研究に対して各方面から強い関心が寄せられている。これに答えるために言語学会は国内的にも「開かれた」機会をさらに多く提供する努力が必要であろう。経済面や大学制度の関係などがあって容易に実現できないかも知れないが、それにはアメリカ言語学会の運営が参考になる。特にアメリカ言語学会が主催する夏期の全国大会と言語学研究会は言語学の底辺を広げるのに大いに役立っている。主催大学が言語学研究会の講義科目を大学の正規のカリキュラムの中に織り込み、学内の有志の教授に加えて国内、国外の一流の学者を招へいして講義に当たらせる。参加する大学院生や若い研究者も各地から集まってくるし、その専攻分野も実に様々である。英語学会、フランス語学会などという個別学会の壁は自然に取り払われて、均衡の取れた言語研究の場ができていくのである。われわれの言語学会も個別学会との共同活動の方にも目を向ける必要があるのではないだろうか。日本語教育も世界的な広がりを持ってきたし、われわれの外国語能力ももう少し洗練されるだろうから、日本言語学会の大会に諸外国から、そして種々の専攻分野から多数の参加者を得て、活発な研究活動の場を提供することは、実現可能な夢といってもよいであろう。

思い出すまま——三題

大東百合子

1

私は専門学校の2年生の夏休みに、日本で開かれた日米学生会議に出席し、二つの分科会でペーパーを読んだ。その一つは「日本民族と文化」という内容だったが、準備のために資料を調べたり討論をしたりするうちに、人間存在の基底をなすものとしての言語に心を捉えられるようになった。

卒業して女学校の教師をしていたある日、言語学を学びたいという希望をふと洩らしたのを聞きつけた知人（両親や叔父たちの友人）が、「それならえらい先生を紹介してあげよう」と、連れて行かれたのが神田の学生会館、そこでお目にかかったのが、誰だろう、新村出先生その人であった。その知人は出版関係で先生とお近付きであったが、学界の事情に詳しくはなかったらしい。はたかそこらの小娘をいきなり学界のトップに引き合わせたのだから、先生はさぞびっくりなさったことであろう。後日思い起こしては冷汗の出る思いである。それでも先生は孫が訪ねて来た位にお思いになったのか、幼稚極まる私の願望に耳を傾けて下さり、まず音声学をしっかりと勉強するようにと、東京外国語学校の千葉勉先生に紹介して下さいました。

新村先生の聲咳に接したのは前にも後にもこの時だけである。ただ、東大の研究室に勤務していた頃、学会宛の先生の御手紙の宛名書きに、いつも「東京(都)……」として、東^{ひがし}-京^{きやう}-都との区別を明確にされていたのを思い出す。都制が布かれて日の浅いころで、私たちも「東京都」には馴染めなかったが、こういうまぎらわしい呼び方を言語学者として先生は不快に感じて居られたのではなからうか。

2

全国組織の学会の多くが、以前には東大の研究室に事務所をおいていた。日本言語学会の事務所も東大の研究室にあったから、1949年に副手（後に助手）にな

った私は、いわば自動的に学会の雑用係をつとめることになった。もっとも、当時の名簿によると、幹事という肩書きを頂戴していたようであるが……。

当時は会員数も少なく、会則もゆるやかで、従って事務量もあまり多くなかったが、戦争末期から戦後にかけて『言語研究』の刊行が困難になっていたのを、活版印刷が無理なら謄写版刷りでも復刊を、ということになり、この関係の仕事でかなり忙しくなった。

苦勞したのは謄写版原紙の校正である。ゲラ刷りがなく、直接原紙の余白に修正を入れるので、第一に極めて見づらい。原紙の下に黒っぽい紙を当てがって鉄筆で削られた白い文字を浮き立たせるようにするのだが、その困難さはゲラに朱を入れるの比ではない。暑い季節には原紙の臘がとけて文字が不鮮明になるのを防ぐのに必死だった。

それに活版のように再校、三校と重ねることが出来ない。随分気をつけたつもりでも、後で見るとミスが残り、申し訳ない思いをしたものである。

「復刊」の最初は13号で、以前のA5版に代ってB5版、発行者も以前の三省堂に代って日本言語学会となった。ただ『言語研究』の題字だけは以前からのものが用いられた。

欧文の原稿は、最初タイプ用ステンシルに打ってもらったが、これがあまり鮮明に出ないので、後には普通の原紙に手書きしてもらったように思う。一見活字ふうで、見事な職人芸であった。

3

会員数もふえ、学会の活動も活発になり、海外との交流もふえて来ると、学会の運営や会誌の編集方針などについて見直しが迫られるようになった。

昭和48年9月の委員会に久しぶりに出席すると、学会の制度検討小委員会を発足させるから、その委員になれ、とのこと、それまでの経緯に詳しくないまま、ついうかうかと承諾してしまった。江実、佐藤則之、徳川宗賢、服部四郎の諸先生に柴田武委員長の加わった錚々たる顔ぶれで、この方々のお引き廻しなら何とか責任を果たせそうな気持になった。

小委員会は9月29日の第1回会合を皮切りに回数を重ね、結論が出るまでに、あしかけ3年を経過した。この制度検討には服部先生が特に御熱心で、たとえば

新しい運営方法の実行可能性について委員の中から疑義が出ると、次回までにその解決策を研究して御披露下さるといふ具合であった。

会長の選挙制度、任期制、およびその責任権限、地域毎の会員数に対する比例代表方式の選挙による委員組織、編集委員長と編集委員会制度の確立、などは、新会則の「目玉」ではないかと思う。各種選挙の細則に至るまできめ細かく定めたこの会則は1975年に施行、その後、いくつかの点で手直しがあつたが、新しい制度が学会の活性化に結構役立ったと考えるのは小委員会委員の自画自賛であらうか。

思いだすまにまに

龜井 孝

せっかくおひきうけをしたものの、いま浅間高原の僻所に老懶の身をよこたえて、さてなにをしたためようかと思ひめぐらしてみに、心に揺曳するところはあれこれさまざま溢れてとめどもないけれど、やはり五十年の昔となるといずれも縹渺とおおむねはとりとめもなきをすでにまたいかんともしがたく、その辺はまずひとつご寛恕をねがうこととして、いまもし学会創立の式典の日に憶い出をしぼるならば、いまもなかなづくに印象にあざやかなのは、「文献学と言語学」——たしかそういう題であった、そしてこれは『言語研究』の創刊号をかざった——この記念講演をあのかききびした歯ぎれですすめられたところの、いまだたしか福島姓でいらせられた辻直四郎先生のその颯爽たるお姿である。ほかの方がたもその日のいでたちはそうであったが、辻先生が礼服で壇上に立たれたのが珍しく映ったことであった。その頃は日ごろつねに瀟灑な和服で通していらした先生が、初めて拝するモーニング姿でおでましたのである。

わたくしは、この年に橋本進吉先生のもと、国語研究室の助手となった。高津春繁氏が言語学研究室に助手となられたのも同時であって、爾後亡くなられるまでずっとちかしくしてくださったご厚誼はわたくしにとってまことに幸せであった。しかしじつは後年その度をくわえた昵懇に比すると、当時はむしろ近づきたい距りもいなみえなかった。いまいうように助手となられたのはたしかにわたくしと同時にあったけれども、大学卒業の年次における5年の差がわかい日のこととてなんと大きかったばかりでなく、名門オクスファードの留学から身につけて帰られた英国スタイルのその粋なスポーツジャケットにこれまた寸分すきな紳士であられたうえ、すでに二冊の英文のモノグラフを世に送っておられ、こちとらべえべえなどは貫禄がちがったのである。

創刊にあたっての『言語研究』のポリシーは書評に重点を置くにあって、高津、服部、泉井といった諸氏はいわば競って水準のたかい書評をものされ、外国の学

術誌にひけをとるまいとするこの新風をまことに快いものにわたくしはうけとめた。この風容たる、すでに凋落して久しきをうらむ。

これは高津さんのいたずらっ気からだったものと思うが、氏の「比較言語学」の元版の書評の依頼をうけた。ただこのときにはすでに太平洋の戦況がきびしくなっていて、ついに予定の号が陽の目をみるに至らなかったのも、おかげで拙文も世にまみえるに至らなかった。これだけは戦争に感謝していい。いま残っていたらなんとも冷汗ものにちがいない。ちなみにいえば、戦後版とちがって、元版は *Laryngaltheorie* に大変くわしかったおぼえがある。

わたくしは言語学科ではなく、国文学科の出身である。もっとも日本文学には、おしなべていえばさしたる興味を感じていなかったから、学科主任の藤村作先生の単位は三年間に一つだけ申しわけにとって、橋本先生の単位だけ九つを全部そろえた。入学初年度（1932）の特殊講義は「国語音声史の研究」であった。これはわたくしの学問形成になかはずく大きな影響をあたえたと思う。この講義には大学院に在籍の服部さんも陪席しておられた。

大学へ進むにあたり言語学科をえらばなかったのは、自信がなかったからである。これから記すところを河野六郎はオーソドックスな意見だといってくれたが、言語学をやるにはギリシャ・ラテンの古典語が必要だ、それにサンスクリットもできるにこしたことはない、英独仏の文献が自由にこなせなくては研究はできない、アラビア語にしるトルコ語にしる専攻の言語にふかくうちこむべきはいうまでもない云々、このように父に言われたのであった。思えば、五十年のあいだに言語学も大きく変貌したものを、今昔の感にたえない。

助手から予科の国語の教師として転出した東京商科大学は戦後の新制への切りかえにあたって一ツ橋大学と変った。そのさいの制度の改革で新設されることとなった言語学の講座をいわばおしつけられることとなった。ここを退官ののち成城大学から招かれたときは、ヨーロッパ文化学科の教授として赴いた。もはや余生は知れているけれど、風狂の放浪はまだ生きるかぎりしばらくつづくことであろう。最後に老耄からの希望をあえて辞さぬならば、あまり言語学を《言語学》に *verwachsen* せしむるの方向に日本の言語学が傾かざらんことを。

言語学会と私

金田 一 春 彦

私は、まだ学生時代の昭和10年ごろ入会したつもりだから、随分古い会員のはずである。多少とも学会の中心に近いところにいたのは、昭和26年に服部四郎博士の御推薦を得て、九学会連合の言語学代表として対馬の言語調査に出かけ、一年おいて、今度は能登調査に出かけたころだった。とにかく九学会連合の調査だったから、民族学・民俗学……など他の八つの学界の学者がいっしょになって、同じ地点を調査するとき、同じ宿に泊まり、知識を交換しあう。また、翌年開かれた研究発表会・座談会に同席するという風で、お蔭で私は、言語学の泉井久之助・柴田武・岩井隆盛氏のみならず民族学の泉靖一・宮本常一・宮本馨太郎、民俗学の和歌森太郎、心理学の築島謙三・安倍北夫、宗教学の池上広正、社会学の中野卓……といった人たちと親しくなり、本当に勉強になった。

そのころ、言語学会の調査と発表は、私・泉井・浅井恵倫氏・柴田武君、その他であったが、言語学会の調査研究は他の学会から地域調査の模範と持ち上げられて、いい気分になり、発表も、凝りに凝って他の学会の人にもわかってもらうように苦勞したつもりであったが、その後、渋沢敬三会長が他界され、規模も縮小して、九学会連合の発表会に出席してみたら、言語学を代表して喋る人も、ほんの特殊な問題を扱っており、あれでは九学会に参加している甲斐もないだろうと思い、いつの間にか縁が切れてしまった。

言語学会の研究発表会に出て、発表したり、司会をしたこともあり、機関誌『言語研究』にも二回ほど論文を載せていただいた。このところすっかり御無沙汰しているが、昔を思うと懐かしさ限りない。

言語学入門したころ

国 広 哲 弥

私が旧制の東京大学文学部言語学科に入学したのは1950年の春だった。当時の言語学科は主任の服部四郎教授、高津春繁助教授、神田盾夫助教授、三根谷徹講師、大竹敏雄助手、大東百合子副手という陣容であった。同時に入学したのは私を入れて10人ぐらいであったかと思う。言語学科に入学したと言うものの、山口県の片田舎から出てきた凡々たる学生であった私は、言語学を勉強しようというような鮮明な意識をもっていたわけではない。旧制の山口高校時代には、言語学関係のことと言えば、国文法の時間の教科書であった東條操著『国語法要説』の中に触れられていたソシュールの学説の紹介ぐらいしか知らなかった。東大に言語学科なるものがあることを知ったのも、入試要綱を取り寄せたときが初めてであった。教授陣のことなど知る由もない。高校時代に興味を持ち始めていた英語学や国語学の関係で、英語学の中島文雄先生、国語学の時枝誠記先生のお名前は承知していた。高校の図書館で中島先生の『英語学とは何か』とか、Jespersenの *Essentials of English Grammar* を見付けて読んだり、街の書店の棚で時枝先生の『国語学原論』を見付けて読んでみたりしていた。このようなわけで、言語学については大した予備知識も動機もないまま、言語学科なら英語と日本語を一緒に勉強するような「異端」も許されるだろうというような軽い気持ちでいた。いま私の考えでは、英語学も日本語学も立派な言語学の一分野であるので、あながち異端だと卑下することもあるまいと思う。ただ言語学科で個別言語を研究する場合は、他の国語学科とか英文科とは異なり、多少広い視野から眺めて行くということになるだろう。

私が入学した年の5月から2年間、服部先生はミシガン大学に客員教授として出張された。私は2年生の後半病気のため自宅療養を余儀なくされ、4年間に在学することになる。服部先生との出会いはあとで記すことにして、在学中の授業で印象に残っているものについて簡単に記してみたい。ギリシア語の初歩を神田盾

夫先生に習ったが、先生は説明をよく英語でなされ、そのイギリス仕込みの発音はほれほれするほど見事だった。上背のある長身を仕立てのよい背広に包み、いつも温顔を絶やされなかった。中島文雄先生の英語学概論と英語学研究（実質は概論）は、よく準備された興味深い講義であった。ひとりで勉強せよと言われたら、とてもあれだけのことを同じ時間で身に付けることはできない。やはり教育は必要である。シェークスピアの本文校訂（emendation）の話など興味津津であったが、放っておかれたら、どこでどうやってこういう知識を手に入れたらよいか分からずじまいだっただろう。ほかによい勉強になった講義としては、非常勤講師で来ておられた金田一春彦先生の「国語諸方言概説」と中田祝夫先生の「訓点語の研究」がある。中田先生はいつも忙しそうにあたふたとやって来られ、頭に玉のように吹き出る汗を手拭いのようなもので拭い拭い講義された。時枝先生の国語学概説には毎年出たが、おおむね御著『国語学原論』、『国語学史』の簡単な解説であったように記憶している。先生が「学説は無理に絞り出すものだ」と強調されていたのを思い出す。

いろいろな先生から多くの有益なことを学んだが、私が真の意味での言語学研究方法を学んだのは、服部先生が帰朝されてからの1年半であったと言ってよい。服部先生の授業の全部、つまり言語学概論と音声学と言語学演習に出た。音声学は出版されたばかりの御著岩波全書の『音声学』を使って音声訓練に重点をおきながら行なわれた。演習では帰朝された年の10月から次の年の夏にかけては Bloch & Trager の *Outline of Linguistic Analysis*, そのあとはやはり Bloch の ‘Studies in Colloquial Japanese, Pt. IV, Phonemics’ (1950) がテキストに用いられた。授業全体から感じ取られたことは、他説に盲従することなく、批判的に摂取すべし、独創性を心がけよ、ということであった。特に Bloch の日本語音韻論は徹底的な批判にさらされたが、いま振り返ってみると、むしろ Bloch の論文の方に問題が多すぎたというべきであろう。語末の「ん」を [-n̄] としたり、「し」と「しゃ・しゅ・しょ」の頭子音を同じ [š̥] としたりする音声学的誤まり、文節末の「と」や「ちえっ」の末尾に現われる [ʔ] を音素 /ʔ/ としたりしているのである。私は批判精神だけは十分に学んだつもりであり、1962年に発表した「国語長母音の音韻論的解釈」（『国語学』第50集）は服部先生の御

説 /VV/ に対して /VR/ を唱える批判であった。

学会創立50周年によせて

江 実
ご みのる

(1) 日本言語学会とのかかわり。

私は昭和2年に京大の言語学科に入学しましたが、迂かつにも会の成立をしらず、会長が私の先生の^{しんむらいずる}新村出教授であることもしりませんでした。そののち、入会し、更に委員になりましたが、これは服部四郎先生のご推薦によるものとききました。

委員会でのおもいでは、あることで会則をあらためることになり、服部東大、徳川学習院、大東津田、柴田東大、佐藤京大の諸先生と大東先生がもってこられた外国の言語学会の会則などを参照しながら、新会則の作成につとめました。会則の新しい点は、(1)学会の本部を東京以外の諸地に移動できること (2)会長任期は2か年で、再選できないこと (3)会長は就任講演をすること、などでした。

会則づくりのほか委員会でおもいいたしますのは、服部先生が年来希望しておられた国際言語学会議を日本で開催することについてですが、これが当時なぜか開催について、委員会では難行につき難行の空気でしたが、ついに1982年夏服部先生の唱導のもとで、日本で盛大に開催されたことは皆様の御承知のとおりです。

(2) 言語学を志したころと、そのあと。

私は大正15年旧制山形高等学校に在学していましたが、3年生のとき、私が極めて尊敬しておりました^{しまむらもりすけ}島村盛助教授から、京大の言語学科にはいり、新村出教授のもとで、アルタイ諸語（満洲語、蒙古語、トルコ語）の研究をしたらよいではないかというおすすめをうけました。英語・英文学の島村教授（岩波の英和辞典の編者、ミルトンの『失楽園』一万余行の反訳、京都あぼろん社刊）がなぜ私にアルタイ語のような東洋よりの言語の研究をおすすめなさったかは、その理由はわかりませんが、おそらく先生御自身が、エドウィン・アーノルドの『亜細亜の光』を反訳し、岩波文庫から刊行されたように、アジア、そしてその言語にも深い関心があられたからではないかとおもいます。先生は君は中国大陸にゆき、

その現地でアルタイ語の古典、現代語を学べとさとされました。

こうして昭和2年に京大の言語学科に入学し、新村先生の御指導をうけました。ところがあるキッカケでアルタイ語の一つの満洲語を独学することになり、その結果昭和15年、満洲語の〈蒙古源流——訳註、502頁〉を先輩木村潔博士、静藤治郎御父子の御援助で京都で自費出版することができ、これとてにかくアルタイ語の一つの満洲語の古典に手を染めることができました。島村先生のおすすめの一つの言語をです。

その後全く偶然他の一つのアルタイ語の蒙古語の調査と研究ができるチャンスにめぐまれました。即ち内蒙古の首都の張家口の蒙疆学院から教官をもとめてきましたが、上述の〈蒙古源流〉のおかげで、早速採用、昭和14年末に蒙疆学院に着任しました。この学院で私ははじめて蒙古の諸地方からえらびぬかれた蒙古人学生に接して、彼らと蒙古文書をよみ、彼らの内蒙古語の諸方言を耳することができました。更に私にとって重要な渡蒙の目的は、蒙古文の〈蒙古源流〉の写本の発見ということでした。3か年ほどつとめて、ついに、従来最良とされていたシュミット本(1829年刊)にまさる三写本をみつけることができました。そしてシュミット本には中国史と中国の文成公主のチベットへの降嫁に関する記事、さらに奥書等に関する長文が脱落していることを発見或は確認することができました。

こうしてアルタイ語のうち満洲語と蒙古語の二言語には上述のようにふれることができました。私にとって残る一つのアルタイ語はトルコでしたが、これは内蒙古ではふれることができませんでした。しかし今でいう西北のシルクロードから隊商がラクダで内蒙古にやってくるので、その逆のコースでトルコ語をつかう人々に接しようと計画をし、成功しそうになったのですが、島村先生が御推薦されたこの第三の言語のトルコ語の現地の研究は敗戦で挫折してしまいました。

(3) どんな本を読んだか。

私は元来多読できず、言語学関係ではアントワヌ・メイエの《印欧比較言語学入門》1冊だけといってよく、京大の2年、3年をかけてその全訳をしました。そのころラテン語の尊敬していました田中秀央先生が幾度も拙宅においでくださりまして、幾頁すすんだかと激励してくださいました。私がなぜこの全訳を決行

しましたかといいますと、田中先生のお弟子で、私の友人（岩波からラテン語文でかかれた日本関係の中古の一文を刊行しています）が或る事情で自殺し、彼が私にこのメイエ本を遺贈されたからです。悲しい反訳でした。

（４）若い方々へのアドバイス。

近頃の＜言語研究＞を拝見しますと、多彩で且つ優秀なことは眼をみはるばかりです。しかし、そこには一つの問題があるようです。それについて卒直に以下私見をのべてみましょう。それはたとえばこれらの優秀な研究者方に対して、理科学系にくらべて、全く文科系のこうした研究に対しては博士号の学位が授与されていないということです。しかし、以下私に関係することで恐縮ですが、その状況下で私の学生の諸君がアメリカではなく、日本でそれを獲得したことについてのべてみましょう。

私は岡山大学に在任中、言語学の一つに「児童の言語障害」という講義をながくおこないました。ところが先般当時の学生であった武内和弘氏が39歳で、＜上顎骨切除患者の言語障害と顎補綴による構音改善に関する研究＞（本文58頁。他図、表等）で歯学博士号を広島大学から授与されたという朗報をたずさえて拙宅をたずねてきました。また今年63年7月、森壽子氏（47歳）が、＜聴覚障害児の音声言語獲得に関する研究＞（572頁）という論文で、東北大学から教育学博士の学位が授与されることが正式にきまったという、これまた別の朗報をつたえきてくれました。私にとってはうれしいことでした。両氏は、拙講をテコのテコにして、こうした成果をあげたわけでしょう。またここに他大学の卒業生に対して示された広島、東北大学の広く且つあたたかい御扱いに対して私は深く敬意を表したいとおもいます。

今や日本が国際的に中心的な位置にあることは論議のないところです。この国際的立場を着実に且つ人間的に深くたもつためには、諸現地の言語を科学的に調査研究する言語学或は他のきびしい諸言語の実地の研究によるより他に道はありません。「物」は「人」によってしかよくうごきません。政府はこのために、理科に対するより以上にこれら人文の研究を援助することが必須であると信じます。どうでしょうか。そして若い皆様がこの方向に積極的に手をどしどしあげてくださることをおいのりいたします。

追——私は『日本語学』1986年、4月号に、「私の歩んだ道——〈蒙古源流の七写本を追って〉」という一文をのせましたが、本文と同趣ですが、そこにはかなり一層くわしく私のアルタイ語の研究の卒直な過程をしるしておきました。

思い出すことども

五 島 忠 久

昭和7年、当時の東京帝国大学文学部言語学科に入学した。まだ日本言語学会はできていなかった。

言語学科の主任教授は藤岡勝二先生、助教授は金田一京助先生であった。

4月の何日だったか覚えていないが、新入生一同が研究室に集められた。主任教授への初お目見えである。新入生10名は緊張しておそるおそる藤岡先生の前にならんだ。このとき先生がどんな訓示をされたか頭に残っていないが、「今年はたくさん入ったから、すこしはましなのがいるだろう」と言われたことだけははっきり覚えている。ピンとひげをはやされた、いかつい風貌の先生を前にして、一同シュンとして声も出なかった。

先生の講義は「言語学概論」のほか「所謂タートル語各論」「ウィルヘルム・フォン・フムボルトを中心とした言語研究史」で、演習は『馬氏文通』をテキストとした「虚字研究」であったが、新入生にとっては「概論」のほかはむずかしすぎてよくわからなかった。それでも、「フムボルト」を聴講していたところ、ある日だれかある学生が何か本をこっそり読んでいたのが先生に見つかり、「出てゆけ」とどなられたのにはびっくりした。こわい先生だという印象がますます強くなったが、5月になって病気になられ、休講になった。先生のお人柄がわかるほどじゅうぶんに接して、教える機会がなかったことは残念であった。

藤岡先生の休講の穴を埋めるための措置のひとつとして記憶に残っているのは演習である。英文学科の市河三喜先生が「音声学」で演習を担当された。図書館の3階(?)にある小さな部屋で行われた。

翌昭和8年に、主任教授として小倉進平先生が京城帝国大学教授兼任で赴任された。この年の講義は「言語学概論」と「国語と朝鮮語との交渉」、演習は「朝鮮語演習」で、崔在翊『朝鮮語の先生』をテキストに用いた。この本はその後戦

災で焼いてしまったが、戦後京都の古本屋でたまたま入手し、今も私の手もとにある。なつかしい本である。

昭和10年卒業後、大学院で1年間学び、千葉県の旧制中学の英語教師となった。以後千葉から大阪へ移ったりしたので、昭和13年の日本言語学会創立大会に出席することはできなかった。

大阪では、石浜純太郎先生の下で、有志が集まり、大阪言語学会を作って、研究発表を続けたことがなつかしい思い出である。

昭和35年、日本言語学会の第43回大会が大阪大学で開かれることになり、当時阪大に勤務していた私は、同僚の今川太郎さんといっしょにそのお世話をすることになった。

10月22, 23日、の両日で、初日は公開講演会であった。講演者と演題は次の通りである。

泉井久之助 「言語のかたちと思惟の形」

金田一京助 「文字以前の言語生活」

ところで、この会場の獲得には苦勞した。なにしろ昭和30年代である。簡単に借りられるような手頃な場所など無い頃である。やっと中の島の大阪府立図書館の地下の一室を借りることができた。それほど広くはなかったが、適当な広さで、当日はいっぱいの聴衆で盛会であった。

評議員会・委員会および研究発表会は23日に阪大医学部の会議室と大講義室で開かれた。阪大医学部の建物はたいへん古風で、階段のステップが狭く、高く、上り下りがしにくかった。金田一先生の両腕を今川さんと2人で両側からかかえるようにして、ゆっくり歩いたことを想い出す。

研究発表の要旨は『言語研究』第39号に出ているが、発表者は山口巖、小出詞子、小沢重男、蛭沼寿雄、今川太郎の5氏であった。

あれから28年たった今日、大阪の街もすっかり変貌した。私の学生時代、構造主義言語学が全盛で、Bloomfield の *Language* がバイブル視されていたのが、今では理論も研究法も大きく変わった。日本言語学会も50年の歴史の中で、内部的にいくつかの余曲折を経て、組織や運営方法がうつり変わり、研究発表の内容も変転した。感慨深いものがある。

『言語研究』が出なかった時代

柴田 武

『言語研究』第12号（昭和18年3月）を見ると、雑誌の末尾に彙報欄があって、「研究室及びその周囲の動向」として次のようなことが書かれている。

（前略）ながらも本誌の編輯に尽力された高津春繁氏は昭和16年10月より東京帝国大学文学部講師に就任されたので、本誌の編輯・事務は生田早苗氏と、同じく10月より新しく研究室の副手に嘱託された柴田武とが責任をもつことになったが、なほ高津氏の御骨折を仰いでゐる。更に生田早苗氏は近く文部省民族研究所へ移られることになつてゐる。

この文章に誤植がないとすれば、これはわたしが執筆したと考えざるをえない。氏のついていない人名は柴田武だけだからである。しかし、この文章を書いたという、はっきりした記憶はない。

それに、文中「同じく10月より」はあいまいで、これは「昭和17年10月より」の意味である。昭和17年9月に戦時中の繰りあげ措置で半年も早く卒業し、その翌月、無給副手というものになったからである。記録によると、昭和18年2月に、生田氏転任のあと有給副手になっているから、「言語研究」の編集について相当の責任を負うようになったのは昭和18年3月以降のことになる。

ところが、「言語研究」の次の号、第13号が出たのは、なんと6年後の昭和24年6月である。その後、わたしは有給副手から助手になっていたが、その助手を昭和23年3月にはやめている。だから、任期中にわたしが手がけたと思える「言語研究」は1冊も出ていないことになる。

もちろん、第13号の校正については手伝っているだろうし、第13号についても協力していると思うけれども、初めから終わりまで面倒を見た雑誌は1冊もない。戦中から戦後にかけての困難な時代のことである。

昭和18年度には、第13・14・15号の合併号を出すことになって、編集・校正・印刷も終って製本にとりかかったときに、三省堂工場で戦災にあい、焼失してし

まった。戦後、第16号、第17号の原稿をそれぞれ別の出版社に頼んでいたが、出版界の混迷もあって、ついに実現できなかった。（「言語研究」第14号の彙報欄）

ここで、もう一度、第12号の彙報の文章に戻ると、この記事のタイトルが「研究室及びその周囲の動向」とあって、「前略」の部分に、徳永康元氏の帰朝、佐藤誠氏の復員といった、東京帝国大学言語学研究室の、正に周囲の動向が書かれている。こうした扱いは、今日になって考えると、学会と研究室（あるいは東京帝国大学）との混同のきらいがある。学会創立以後、日本言語学会は東京帝国大学言語学研究室と一心同体でやって来たために、こういう文章も不思議ではなかったらしい。東京帝国大学の助手なり副手になった者は、いや応なしに、自動的に学会の幹事をやるならわしがずうっと続いたのであった。

雑誌は出なかったが、大会を持ち、講演会を開いたりしたので、わたしを含めて会員は、学術講演を聞くことはできた。昭和18年当時は、まだ初代の新村出会長の時代だった。新村会長は、創立大会をはじめ初期の役員会や大会には出席しておられたが、わたしが幹事だった間には、会合には1回もおいでにならなかったと覚えている。副会長であり、研究室の最高責任者である小倉進平先生のさしずで、わたしが会長との事務の報告・連絡に当たった。一面識もなく、神様に近い大先輩で、学会の会長でもある新村出氏あてに、事務的な内容であっても、1通の手紙を書くのに苦心した。何度も書き直した。その拙い手紙に新村会長は、直ちに、いつも葉書で、例のチビた筆でびっしり書き込んだ御返事を下さった。

おそらく、わたしの手紙の拙さが印象に残っていたのか、あるいは、手紙の回数が多かったのか、昭和25年だったと思うが、国立国語研究所で初めてお会いし、自己紹介をしたら、「ああ、言語学会のお世話をして下さってる方ですね」というおことばをかけられた。これが新村出氏との最初にして最後の対面対話だった。それがいま、その新村出氏の業績を記念してできた新村出記念財団の理事を仰せついているのは、不思議なめぐりあわせだと思わざるをえない。

わたしは、昭和43年、東京大学に帰ってから、別の形で再び「言語研究」の編集にかかわるが、そのときのことは別にして、戦中、戦後の幹事時代を思うと、今日の民主的に運営され、活発に活動している、わが日本言語学会は、まるで別世界のように思われる。

一老学徒の回顧

関 本 至

日本の大学に言語学科が設けられたのは、明治19年（1886年）、東京大学に博言学科が置かれたのがはじめて、のち明治34年（1901年）に言語学科と改称されて今日に及んでいるということです。ついで、京都大学に言語学科ができたのは、たしか明治40年頃で、いわゆる旧帝大で言語学科をもつのは第2次大戦まではこの二つの大学だけであったのではないかと思います。

そして「日本言語学会」が設立されたのは昭和13年であり、その設立のいきさつは機関誌『言語研究』の第1号（昭和14年1月発行）の彙報の中の「日本言語学会会報」に述べられています。（これは複製してこの『言語研究』特別号に掲載されるはずですが。）会長新村出先生、副会長小倉進平先生以下の役員の先生方のお名前がずらりと並んでいますが、今やそのほとんどの方が故人となられ50年の歳月の経過をしみじみと思わされます。なお、学会設立の実際の発意と計画には高津春繁先生その他東大の先生方が主として当たられたものと推察します。（私は昭和16年頃に入会したかと思いますが、学会発足当初のことは知りません。）

私の手許には『言語研究』の第1号以下が揃っていますが、それを通観しますと、昭和14年に第1～4号4冊、15年に第5～6号2冊、16年に第7・8合併号と第9号の2冊、17年に第10・11号合併号1冊、18年に第12号1冊と出され、そのあととぎれて昭和24年6月に第13号が発行されています。つまり第12号と第13号の間には6年余りのブランクがあります。ついで第14号（24年11月）から第21号（27年3月）まではガリ版印刷で、活版印刷に戻るのは漸く第22・23号合併号（28年3月）からです。戦中、戦後、学術活動が（そして日本の社会が）いかにきびしい状況の中に置かれていたか十分に想像できるでしょう。

昭和28年になって日本言語学会には新しく委員の制度が設けられ、最初の委員長が服部四郎先生でした。（この制度は当時の中堅の先生方が長老の評議員をいわずに擧げる意味で作られたやに聞いています。あるいは記憶ちがいかもしれ

ませんが。)その後、昭和50年から、会長その他の役員を全会員の投票によって選ぶ制度ができ、日本言語学会のいわば民主化が確立し、爾後、その線に沿ってほぼ順当に運営されています。

いろいろの経緯はありましたが、「日本言語学会」は各地の言語研究者を結びつけ、日本における言語研究を促す上で大きい役割を果たしてきたと思います。

戦前、言語学科は東大、京大だけにあったときに書きました。戦後、新制大学ができて言語学科があちこちの大学に設けられるようになりましたが、広島大学には新制発足と同時に言語学科が設けられました。私が広島大学に赴任したのは昭和27年で、28年に言語学専攻の第1回卒業生1名が出ています。はじめは半講座といって、助教授一人だけの学科で、予算もきわめて乏しく、着任当時の言語学科の図書が何と38冊にすぎませんでした。昭和33年に講座制となり、やがて大学院修士課程、博士課程が置かれ、51年度から実験講座になりました。かなり前から、各大学当局や日本言語学会などから文部省に対して言語学科を実験講座にするようにとの要請を出しつづけてきたのですが、漸くそれが実現したのでした。時代の状況にもよることだったでしょう。実験講座となると3倍の予算がかかります——丁度、私が定年でやめたのと同時であったのはいささか皮肉でしたが、言語学のためには慶賀すべきことでした。

広島大学と並んで多くの大学でつぎつぎと言語学科が設置され、今日では国公立を合わせるとかなりの数になるでしょう。言語学専攻の学生も随分増えました。言語学関係の図書の出版も相当の数にのぼり、ある意味では言語学隆盛の時代かもしれません。

それにつけても50年の昔、人のあまりやらない言語の学に志したとき、この道을導いて下さった落合太郎、泉井久之助両先生をはじめとする諸先生方の学恩に対して感謝の念を新たにしますとともに、日本言語学会にいささか関わる事ができて、その大会に参加したり機関誌『言語研究』に接したりして多くの啓発を受け、また同学の方々と昵懇にさせていただいて数々の教示をえたことに大なる仕合わせを感じます。おわりに、今日まで日本言語学会の運営に骨を折ってこられた先学・同僚の方々に深い敬意を表し、学会の今後のいよいよの発展を祈念する次第であります。

昭和10年代の頃

徳永康元

私が大学を卒業したのは昭和11年の春で、言語学科の謝恩会のあった日がちょうど2.26事件の当日だった。前日來の大雪で電車やバスが殆んどとまってしまい、牛込の会場へ辿りつくのが一苦勞だった。その上、事件の起った早朝から新聞やラジオのニュースも全く入らず、皆お互いに持ち寄った巷の情報に気をとられて、卒業の安堵感や将来の抱負を語るどころではない緊迫した雰囲気だった。

私の学生時代の言語学科には、小倉進平、金田一京助、神田盾夫の諸先生に、副手として八木亀太郎さんが研究室に居られた。卒業後、私は東大図書館に勤めたが、当時の言語学研究室は図書館の建物の中にあっただので、八木さんとはその後も始終お目にかかる機会ができた。

八木さんは、米国で学ばれた荒木茂氏に師事してペルシャ学を専攻された方だが、印欧言語学から古典文学・哲学に亘る幅広い教養人だったから、日常のお付き合いの中でもいろいろ貴重な知識を教えてくださいました。八木さんは又、将棋の達人でもあったので、その頃図書館の一室で西蔵語資料を整理して居られた仏教学の松濤誠廉さんを誘って、昼休みにはよく本郷通りの将棋会所へ行き、二人で八木さんに手ほどきをしていただいたことも、忘れ難い思い出になっている。

「日本言語学会」発足のことを最初にきいたのも八木さんからだった。当時、研究室の副手だった八木さんは、先生がたの意をうけて東京と関西との連絡に当って居られたようだ。

学会の成立前にも、東大の言語学科を中心とする談話会のような集りは時々あって、京大の新村出先生、外語の八杉貞利先生や、言語学科の大先輩で中国通の後藤朝太郎氏がよく出席されていた。会場はいつも山上御殿だったと思う。

日本言語学会が正式に結成されたのは、『言語研究』の第1号（昭和14年1月）によれば、その前年の13年5月だったそうだが、同じ月の5月28日には東大の法文経第36番教室で創立大会が開かれ、そのあと、福島（辻）直四郎、柳田国男、

白鳥庫吉諸氏の公開講演があり、聴衆約 300 人に及ぶ盛会であった、と記されている。

この講演会は私もききに行ったのだが、聴衆の人数が多かっただけでなく、あまり言語学とは関係のなさそうな他の学科の友人・知人や、更には他学部の人たちまでが大勢ききに来ているので驚いたことを覚えている。これは、当日講演をなさった先生がたの顔触れの故もあったにせよ、やはり言語への関心が社会一般に高まっていたことのあらわれだったにちがいない。

明治期の言語学の最初の専門誌は『言語学雑誌』（明治33—35年）で、この頃も言語学がいろいろな学問分野から注目と期待を集めた時期だったようだ。この「言語学雑誌」は僅か数年で休刊になったが、いわばその復刊とも言うべき『言語研究』のほうは、戦中・戦後の困難な状況を切り抜けて今日に至ったことを心から喜びたいと思う。

日本言語学会とのかかわり

野 上 素 一

日本言語学会は昭和63年に50周年を迎えるがこの機会に初期の日本言語学会の横顔を眺めてみよう。だが別に豊富な資料があるわけではないのだから、結局はあの頃の東京帝国大学言語学科の教授陣の説明に終るかもしれない。

私が東京帝国大学言語学科に入学したのは昭和6年4月のことであった。

言語学科の主任は藤岡勝二先生で、われわれは言語学概論を習った。

先生の専門領域はアルタイ諸語の研究であり、特に満州語の造詣は深かったが、学科主任というので言語学概論を講じられたのであろう。

先生はフンボルト、ブルークマンから始って、印欧比較文法やジュネーヴ学派のことやプラーク学派の音韻論などを述べられた。

藤岡先生の下に辻直四郎助教授がいて、いつも瀟洒な和服姿でハイカラな比較文法の講義をなさったが、所属は梵文学であった。この梵文学の研究室は言語学研究室の隣室であったのでわれわれは彼らと親しく交際した。

特に田中於菟弥さんは兄き分としてわれわれの世話をしてくれた。彼は色々の本を訳したがその中でも有名なのは古代インドのサンスクリット語の説話集「シュカ・サプタティ」（別名鸚鵡七十話）である。

そのほか忘れてならないのは、アイヌ語の権威金田一京助先生と琉球語の伊波普猷先生である。

またその頃の東大の文学部の言語研究者の若いリーダーは二人いた。

その一人は、ギリシア語とラテン語の専門家で、オックスフォード大学帰りの高津春繁さんでその頃言語学科の助手であった。

彼の書齋には必要な参考書はすべてそろっており、朝早く郊外にゴルフに行き、一汗かくと自宅に帰り読書に耽けるという生活をしており、一同の羨望の的であった。

もう一人は、アルタイ諸語の研究から始って、日本語の系統の解明と取組んで

いた服部四郎さんである。

服部さんはすでにその頃東大の講師であったと記憶している。

さて東大には、服部氏と同じく日本語の起源や性格を明らかにすべく努力していた学者が数名いたが、もっとも有名なのは、国語学の権威橋本進吉さんで、その流れを汲む人は、亀井孝さんであろう。

それ以外の著名な日本語学者としては、金田一春彦さんや大野晋さんなどがいるが、少し角度を変えて眺めれば、河野六郎、村山七郎などの諸氏も同じグループに属しているということができる。

その頃の言語学研究室の常連ではないが、時々顔を出すのは、神保格（英語学、音声学）、八杉貞利、井桁貞敏（ロシア語）などの諸先生であった。

市河三喜先生も御出身は、言語学科で、『聖書の英語』は名著として有名だったので、同じ英文科の先生方の中でも別格に扱われていた。

さて言語学科の副手は、四国の松山高校出身の八木亀太郎さんで、よく学生の世話をするので有名だった。専攻はペルシア語であった。

西洋古典の先生としては、ラテン語は呉茂一先生がいたが、新学期が始って間もなく病気になられたので、学校当局は京都帝国大学の教授の田中秀央先生を講師に任命して集中講義を依頼した。

そしてギリシア語の担任は神田盾夫先生であった。

さて私が東大の言語学科に入学したのは、上述したように昭和6年4月だった。定員5名のところ学生は3名しか集らなかつた。

その中で一人の最後まで氏名不詳の人は新学期が始まるとすぐ蒙古に学術調査に出かけて行方不明になった。後できくと旅行中病気にかかって没したということである。

残った二人の中の一名は、服部正己君であるが、彼は大阪高校の出身で、その頃からすでに「コギト」同人として有名だった。ある日突然服部君の姿が教室から消えてしまったのできくとドイツへ私費留学したとのことであった。しかし無事帰国して論文を書いて卒業した。卒論はゲルマン語についてであった。主著としては「ニibel族の厄難」と「ディルタイ体験と文学」（昭和23年、天理時報社）がある。しかしその後服部正己君も病没し、昭和6年入学者は私一人になってし

まった。

私は昭和9年卒業、一年間東大大学院にいたが、その後間もなく第一回日伊交換学生として外務省文化事業部からイタリアに派遣された。そしてすぐローマ大学に入学した。

ローマ大学総長は、私に正式の学生として所定の単位をとってから卒業するように命じた。そこで多くの試験を受け、必要な単位をとって昭和13年10月に卒業、ドットーレ・イン・レツェレの称号を得た。

さて話を東大言語学科に戻すと、その後多くの優秀な学生が現れ、それらの人々によって日本言語学会は充実した。それらはハンガリア語の徳永康元さん、トルコ語の柴田武さん、ヒンドスタニ語の井筒俊彦さんなどである。

さて日本言語学会の会員は国の内外で活躍したが、海外の学界でも大活躍した。ここで、私も日本言語学会から派遣されて渡航した海外の学会の話をしよう。

それは第11回国際言語学会と称されるもので、1972年8月28日から9月1日までイタリアのボローニャ大学で開かれたが9月2日には会場をフィレンツェのパラッツォ・ヴェッキオに移して閉会したものである。

この会議の母体は、CIPL(Comité International Permanent des Linguistes)であったが、現地での代表者は、Prof. Luigi Heilmannであった。参加者の数は大変多く、アメリカ184名、西独121名、イタリア100名、フランス82名、オランダ70名、英国68名、ソ連63名、カナダ43名など学者の外に同伴者が800名いた。こうして全部で3000名に達した。よくみると従来は参加しなかった地方からもかなり参加しており、アジア、アフリカからも多数参加し、タイ、インド、韓国、ガーナ、ナイジェリアからも小数ながら参加した。日本からは20名の参加があった。しかし研究発表者としては、日本の服部四郎氏は“The structure of sememe”高田誠氏は“Analyse cartographique de la structure d'un système d'adjectifs,”池上嘉彦氏は“Concrete motion vs. abstract motion: The semantic structure of verb at the(deepest) stratum,”四倉早葉氏は“Tagmemics as wave grammar”などでその他の発表としては、Joseph Greenbergは「言語の普遍的特徴」、Hansjakob Seilerは「一般的特徴と普遍的特徴の差」、Luis Prietoは話し手側の関与的特徴という二重の関

与性を認めつつ (*bonne compréhension*) の内容を明らかにする点についてという話をした。

また Tullio De Mauro はソシュールの言語の材料の混質性について話した。

その他記念講演もされたが、イタリア文部省大学教育局長 Salvatore Comes の「イタリアの大学における言語学教育の歩み」は注目をひいた。閉会の辞はイタリア言語学の長老 Giacomo Devoto が行った。

第1回大会の思い出

長谷川松治

この特別号には『言語研究』創刊号の彙報が複写されて載るそうだから、あるいは不要の文になるかも知れないが、現在の会員の中で、50年前の創立総会に参加した経験をお持ちの方は、もうそう多く残ってはおいではいけないと思うので、おぼろげな記憶の糸をたどりながら、当日の様様を述べてみることにする。

僕は前年の春、横浜の学校に勤めることになり、仙台から東京に出てきていたが、昭和13年4月だったと思う、仙台の小林淳男先生から、いよいよこんど、日本言語学会が設立され、来る5月28日（土曜日）午後1時半から本郷の東大で創立総会が開催されることになったから、君もぜひ出席するように、という手紙をいただいた。

待望の全国学会成立の喜びと期待に胸をはずませながら行ってみると、会場の法文経30何番だかの、かなり大きい階段教室がほぼ一杯になるほどの盛況であり、壇上にずらっと並んでおられる錚々たる先生方の姿を望見して、少なからず興奮したことを覚えている。

会は初代会長に推された新村出先生の開会の辞に始まり、前半は、経過報告はじめ型どおりの手順を踏んで正式に学会を発足させる総会議事に当てられ、後半は、当時まだ福島姓を名乗っておられた印欧語学の辻直四郎先生（講演題目「文献学と言語学」）、民俗学の柳田国男先生（「鴨と哉」）、東洋史の白鳥庫吉先生（「寺と仏の語源」）の3人の講演が行われた。

辻先生の話は、トカラ語資料の中の十二支名を材料にしながら、文献学と言語学とが相互に協力提携すべきものであることを説くものであって、「文献学が言語学を欠くことができないのと同じように、言語学も文献学なしには成功を収めることができない」という Debrunner の言葉を結びにされた。

柳田先生の講演は、和歌や俳句に多用される、古くはカモ、のちにはカナという形を取る語は、決して和歌や俳句の専有物ではなく、むしろ口語起源のもので

あって、実はアノナのナや、アノネのネと同一機能を果す語であり、日常の生きた言語生活の中で、話者が互いに相手の注意を引くために話の途中に随意に挿入する合の手的要素にはかならないことを立証しようとするものであって、名古屋弁のナモ、『坊ちゃん』のあの有名な「ナモシ」、東北方言のナスもしくはナシ、はては広島県西部のノンタまで飛び出すという、いかにも柳田先生らしい内容であった。先生がこの題目を選ばれた真意は、言語学者に対して、言語を取扱うに当って、常に言語が日常生活の中で果している生きた機能を見失わないようにせねばならないということを戒める点にあるのだなと納得しながら耳を傾けた。

もう一つ柳田先生の講演で目を引いたのは、どうやらその日のためにきちんと用意した原稿を目で追いながら話を進めるといのは先生の流儀ではないらしく、和服の懐から相当部厚いメモ用紙の束を無造作につかみ出して机の上に置き、それをパッと開いていきなり話し始められたことである。一瞬、あの厚いメモの束の中に一体どんなことが書き込んであるのか、のぞき込んでみたい衝動にかられた。

学会発足当初の会員数はどれくらいだったのか。正確な数字は知らないが、何しろ戦前は、国立大学で正式に言語学講座が設けられていたのは東京と京都の2大学だけであり、言語学は明らかに少数派の学問であったから、せいぜい200名どまりだったのではないかと想像する。それが今では、昨年末に出た名簿によると約1200名に、すなわち6倍にもなっている。ずいぶん大きくなったものである。また『言語研究』創刊号に「然し今日では既に学会の組織を見た以上是非日本にも大会を招聘して文化日本の面目を紹介してやりたいものである」と書いておられる千葉勉先生の国際言語学会開催の願望も、ついに40数年後（1982）に達成された。

日本言語学会創立50周年おめでとう！

ベルリン時代の思い出と G. J. Ramstedt の手紙

村山七郎

第2次大戦中、1942-1945年ベルリンで勉強したところ Max Vasmer (Slawistik), Erich Haenisch (Sinologie, Mongolistik), Annemarie von Gabain (Turkologie) 諸先生との関係が深かった。レニングラードからコーカサスに避難していた Nikolaus Poppe 教授 (Mongolistik, Altaistik) はドイツ軍に占領された避難地からベルリンに来て、Haenisch, von Gabain 先生らの尽力で、ベルリン大学でアルタイ比較言語学、モンゴル語の講義を行った。Poppe教授のドイツ語はドイツ人とかわりがなかった。アルタイ学の講義のさいは von Gabain 先生がさかんに質問し、Poppe 教授との間に論争になることもあったが、これは私にとって勉強になった。von Gabain 先生による講義筆記はじつに見事であった。私はそれを見せていただいて写したことがしばしばあった。三人の東洋語大家の集まる講義に出席できたのは私の幸運であった。言語学に関心が深く語学の秀才であった杉浦宏さん（一高時代河野六郎さんらの友人）も時折り聴講した。そのころ、Poppe 教授は Asia Major—Neue Folge. 1. Jahrgang 1944. 1. Heft に Die Sprache der mongolischen Quadratschrift und das Yüan-Ch'ao Pi-shi (モンゴル方形字の言語と元朝秘史) という論文を発表し、その抜き刷りを私にくださった。この論文は私にとって非常に重要となった。

或るとき Poppe, von Gabain 先生は私にヘルシンキの Ramstedt 教授に手紙を書くようすすめた。手紙を出したところ、懇切な返事がとどいた。ここにそれを発表しておきたい。

Haenisch 教授（御息は日本学者）は Vasmer 先生の親友で温厚、親切な方であった。Vasmer 先生によると、合唱団 Sing-Akademie のメンバーで、公演もされる、ということだった。

そのころストラスブルク大学のスラヴ学教授だった Unbegaun さんがベルリンに来られた。ドイツ南部で強制労働に従事していたが Vasmer 先生の骨折り

で釈放されてベルリンに来たのであった。そして音声学研究所でコーカサス出身のソ連兵捕虜の音声を調査する仕事につくことができた。von Gabain 先生が自宅に住まわせてあげた。このころ何度か Unbegaun さんからコーカサスの言語の子音の話聞いた。Unbegaun さんは言った。「ストラスブール大学で反ナチス・デモが計画されているという噂をききつけたドイツ軍が、デモがあるという日に、何も知らずに大学に来た先生や学生たちを全部捕えてドイツの強制労働所に送ったのです。朝、妻に『大学へ行って来る』と言って自宅を出たきり、家に帰っていません。」それから何カ月かたったころ、Unbegaun さんは、Vasmer 先生らが「途中はあぶないから、しばらく模様を見るように」とすすめたが、忠告をふり切ってベルリンからストラスブールに向った。この旅は苦難の連続だったと思う。私たちはみんなで心配していた。私は1945年末帰国してからかなり後で、Unbegaun さんがストラスブールに戻ったことを知った。その後ロンドンに移り、そこから何度か手紙をいただいた。1972年には名著 *Russian Surnames*, 529p. が Oxford で出版された。そのロシア訳がモスクワで出版されるという。

1961年、Göttingen でドイツ東洋学会の大会が開かれ、それに参加した後、ベルリンの Nikolassee 湖畔にお住まいの Vasmer 先生を訪れた。その頃も、西ベルリンの Freie Universität で講義をされていた。先生はピアノが上手であることを知っていたので、何かひいて下さいとお願いしたところ「しばらくひいていないから、うまくひけるかどうか」と言いながら、Mozart の *Zauberflöte* のアリアをピアノ伴奏で歌って下さった。そして、先生のライフワーク *Russisches Etymologisches Wörterbuch* の、お手許の全分冊を下さった。それは製本して今も愛用している。

ベルリンでは Japan-Institut の所長 Ramming 先生とも親しくしていた。戦後、先生はドイツ民主共和国の学士院会員となられた。ペテルブルグ大学でポリワノフと一緒に日本語を勉強したそうで「ポリワノフは驚くほどすぐれていた」と私に話された。ただ一人の御子息を戦争で失われた。先生の高弟は Ruhr-Universität Bochum の B. Lewin 教授である。先生と Lewin さんの努力で旧 Japan-Institut の蔵書はルール大学に現在属している。私は1960年のモスクワの第25回国際東洋学会議の折、Lewin さんと知りあい、1965年秋、ルール

大学が開設されたとき Lewin さんの世話で客員教授 (Gastprofessor für ost-asiatische Sprachwissenschaft) にむかえられ、同大学の第 1, 第 2 セメスターの講義を行った。第 2 セメスターの折は京都大学名誉教授宮崎市定先生もシナ学の客員教授として来られ、同じホテルで暮らした。

ドイツ、とくにルール大学の東洋学者たちとの関係は今もつづいている。

Brief von G. J. Ramstedt an S. Murayama.

Helsinki, 6/9, 1944.

[9月6日]

Sehr geehrter Herr S. Murayama,

Ihren freundlichen Brief habe ich bekommen (schon vor Wochen, aber leider konnte ich nicht sogleich antworten) und will gern Ihnen in Ihrem lobwerten Bemühen die Muttersprache auch wissenschaftlich gut kennen zu lernen meinerseits, so weit ich nur kann, Hilfe leisten.

Aber—ich kenne die Entwicklung der japanischen Sprache durch die vergangenen Jahrhunderte gar zu wenig. Es schmeichelt mich natürlich, daß mein Freund Prof. Poppe und die tüchtige Kollegin Dr. Annemarie v. Gabain sich über meine Kenntnisse so rühmend geäußert haben, aber ich habe nie Zeit gehabt mich mit allem dem zu beschäftigen, was ich selbst als interessant und möglich entdeckt habe. Was hier wahr ist im Lobe, ist nur daß die sprachwissenschaftlichen Methoden in der Forschung unbekannter oder wenigbekannter Sprachen in Finnland, unter unseren Forschern, glücklicherweise zuverlässig und ergiebig sind. Wenn man in der finnisch-ugrischen Sprachforschung keine alte literäre Denkmäler und Stützpunkte hat, hat man das Etymologisieren so viel genauer auf phonetischen und logischen Gesetzen basieren müssen, um alle Lücken und Leeren überbrücken zu können. Professor Bernhard Karlgren in Gotenburg—er ist der beste Kenner der Geschichte des Chinesischen und sogar "Protochinesischen"—sagte mir in Tokio, daß die finnisch-ugrischen Forscher erstaunlich gut arbeiten in einem Felde wo die Wegzeichen ganz fehlen; er hat sie immer bewundert und ihnen zu folgen versucht.

Es kommen in den finnisch-ugrischen Sprachen vielerart uralte

Entsprechungen vor, die auf Lautgesetze deuten, die man in den indogermanischen Sprachen nicht so deutlich wahrnehmen kann. So ist z. B.

finnisch *antaa*=ungarisch *ad-ni* ("geben")

finnisch *tuntea*=ungarisch *tud-ni* ("kennen")

finnisch *lintu* ('Vogel'), lappisch *lodda*, tscheremiss. *ludo*, d. h. ganz wie im japanischen "Nigori": *mizu*—*midu*-*mintu* 'Wasser' (*mi*, Kor. *mil*) (Ainu *mintu-chi* "Wassernymphe, Wassergeist"), *mado* 'Fenster'—*manto*—*ma-n to* "des Auges Tor" (altgermanisch *augadora* "Fenster") mit *ma* aus altem *mai*, jetzt *me* und *ma*- in *mayu*, *matataku*, wie *te* "Hand" und *ta*- in *ta-yasui*, *ta-moto*, *tasukeru* usw., *he* "Schiff" in *he-saki* und *ha*- in *hama* "Hafen" < **pa-n ma* "Schiffs-Platz, Platz für Schiffe" aus altem *tai*, *pai*; so auch *deru* < *ideru* (noch *o-ide*!) aus **inte*-, **intu*- (woher *izu*-ru).

Wie *nt* zu *nd* und später zu *d*, geht auch *nk* durch *ng* zu *g* und *mp* durch *mb* zu *b* über: *mugi*, ainu *munki*, *kugi*, ainu *kunki*, *kage*, ainu *kange*, *sageru*, ainu *san* "unter", *san-ke*, Ryukyudialekte *san-ja*, *sańńa* "das untere Haus"; *siro-kaba*=Shiro-*kamba*, *kobu*-*kombu*, ainu *kombu*, koreanisch *kompoi*, *kompö*; *nabe*, kor. *nampi* usw. Sie können die Liste von solchen Entsprechungen selbst füllen, wenn Sie Bachelor's Ainu Dictionary und Miyara's Ryukyu Dialekte (ein sehr wichtiges Wörterbuch!) finden können.

Zu den meisten finnisch-ugrischen phonetischen Erscheinungen findet man genaue Parallelen in den Beziehungen zwischen japanischen und koreanischen Wörtern; so z. B. jap. *sima* (Insel), kor. *söm*; jap. *kuma* (Bär), kor. *köm*; jap. *nata*, kor. *nat*; jap. *hata* in *hatake* < *hataake* "geöffnetes Feld, Acker", kor. *pat*; jap. *kusa* (im *nanagusa* < *nana-n kusa*) = kor. *koč* "Blume" (d. h. altes *č* ist im jetzigen Jap. *s*, und so ist auch altes *s* und auch *r* jetzt durch *s* vertreten).

Hätte ich Zeit und wäre ich etwas jünger, wollte ich mich gerade den japanisch-koreanischen Studien widmen. Dieses Forschungsgebiet liegt noch unbearbeitet da; ich weiß es aus den wackelnden und unrichtigen Resultaten, die die jetzigen Forscher auf diesem Felde aufweisen. Die Arbeitsmethoden und die nötige Schulung scheinen noch hier ganz zu fehlen. So spricht man z. B. vom Verbe *masu* als "Höflichkeitsverbum", während es aus *—ma* ("Gelegenheit, Platz für...") und das Verbum *suru* (*se-ru*) zusammengesetzt ist; *arimasu* < *ari-ma suru* "die Gelegenheit haben zu sein, die Gelegenheit ausnutzen um zu sein", wo *ari* das Nomen-Verbi ist wie in *ari-sō*, *ari-yō*, *arigatai* (< *ari ni kata-si*) und *ma* dasselbe wie in *hima*, *tema*, usw. und auch *ima* "jetzt", (*i* "dies") kor. *i-mam-ttä* "jetzige Zeit". Daß hier *suru* vorhanden ist, erhellt aus *arimashō*, *kimashō* mit *sh*,..... (不明個所) *dasu*, *hanasu*, *wakasu* etc. immer *dasō*, *hanasō*, *wakasō* heißt. Das Verbum *suru* ist dasselbe wie kor. *h̄qda*, das auf *he-da*, **se-da* zurückgeht, und dem mantschu *se-mbi* "sein, machen, sagen" entspricht.

Von was ich hier oben kurz angedeutet habe, verstehen Sie, daß ich Ihren Brief mit großer Freude begrüßt habe und daß ich Ihr Bemühen in die alte Entwicklungsgeschichte Ihrer Muttersprache einzudringen vom Herzen grüße und Ihnen gern helfen will. Mit guten Werkzeugen, d. h. mit allgemein schon anderwärts gebrauchten Methoden, ist, gerade was das Japanische betrifft, viel zu tun und viel von alten Missverständnissen zu beseitigen.

Ich hielt vor einigen Jahren in der Finnischen Akademie der Wissenschaften einen Vortrag "Zur Entwicklungsgeschichte der japanischen Sprache"; dieser Vortrag ist schon längst finnisch gedruckt, und die deutsche Ausgabe der Sitzungsberichte der Akademie ist jetzt im Drucke. Sobald ich deutsche Separatdrucke habe, will ich Ihnen ein Exemplar senden. Leider war der Vortrag sehr kurz, nur 20

Minuten, da auch andere Sachen Zeit brauchten und man nur ein Einfüllen von mir verlangte.

Ich bitte, überreichen Sie Herrn Professor N. Poppe und Fräul. Dr. v. Gabain meine herzlichen Grüße und Wünsche um ihr Wohlergehen. Ich gedenke in diesen Zeiten sehr oft an alle Gefahren, die man jetzt erlebt, und wundere oft, wie und warum es doch in Finnland zu leben so gut ist. Ich bin ganz gesund und außer Gefahr. Also grüßen Sie meine Freunde und Bekannte.

Freundlichst

G. J. Ramstedt

東 海 道 誌

吉 町 義 雄

大正年間、神戸一中時代に岡崎屋刊行の会話書何種かには、左程興味覚えなかったけれども、水野繁太郎の『羅甸（ラテン）文法階梯』（1903、明治36初版、1907、増補3版、南江堂）第何版かと岩波発行の同種現行本の何れも、序文には可なり感銘を覚えた。

関東大震災で京大へ転学する迄の数箇月に遠くから拝眉した斯道著名学者の羅列は差控へて、東大で朝鮮語の時間は数回聴講したのに、金田一京助先生には一回も機会のなかった事位は記して置きたいが、京大ではやはり便宜上独文としたのを学年末に思ひ切って言語学と定めた。尤も正式には文学部文学科第何号と云ふ卒業証書免状なのである。

毎朝5時起床仏語精進と伝聞の当時京大講師落合太郎先生は、「entre quatre yeux は（挿入）sをリエゾン(> z)するんだよ、○○は是を知らなかった」と本職教官を競争視談笑される一方「露西亜語なんて僕は文字も知らないよ」だから当然だが、往年存在した優秀生徒の飛越し進級者の一人と仄聞の、「外国文学は日語に訳しては駄目、原語で読まなければ」党で英語大嫌ひの片山正雄先生は三高で担任教授の縁（と共に同ならぬ対名感覚も）が新設九大法（経）文学部同職となり「希臘文字が仲々覚えられない」と告白されたから、恐らく（斯字少許散在以外異体文字皆無の）Georg von der Gabelentz が Die Sprachwissenschaft, ihre Aufgaben, Methoden und bisherigen Ergebnisse. (吉町生年) 1901再版1969 Tübingen は意識外一書と推せられる。同書(29頁)に引用(Hovelacque の La linguistique 劈頭) “Le linguiste n’a que faire d’être polyglotte, ou, du moins, il n’est point nécessaire qu’il le soit.” (独訳無し)「言語学者は博言家でなくてよい、又は、少くとも、少しもさうある必要はない」と断ずる一文と共に、言語才能 [Sprachtalent] と言語学 [Sprw] の項目(48-9頁)において、六十近い言語を流暢に話した Mezzofanti 枢密卿 [Cardi-

nal] が、某の拉丁文典を理解出来ずに羨しがった謙讓さを記録し、又、亜弗利加の Hottentott の或部族が元来の口蓋舌打音を発する能力を失って、親指と中指とを弾いて代用する報告の箇条 (270頁) は、Dravida 語の母音諧調 (402頁) などよりも珍重知識であらう。

毎週一回 (月一回位休講) 土曜午后に大阪外語から来講の Н. А. Невский 先生 (「露語を正しく話すのは独人である」と言はれた) が筆者最初音読に「з, з, з, з」と叱正された嚴重に面喰ったが、「露西亜語のアクセント目茶苦茶ですよ」と大観笑はれたのはともかく、邦文入門書にも此頃は記述される事なきにしも非ずの原則「多音節語において強きアクセントが第一音節に存しない場合、強きは直前母音 (自体勿論弱化変形するが) は高さを有する (従って未熟外国人はその高さを強さの様に取り易い)」を全然注意解説されなかったのは今現に筆者は (少くとも NHK テレビで女性発音を視聴して) 不思議に思っている。

一方動詞の体 [aspect, вид] の説明で西欧最高權威書に同僚の О. В. Плетнер 先生が廿幾つの誤を指摘されたと云ふ自慢と共に、自分が是からやりたい二言語は梵語と (古典) 希臘語だが如何な教科書が良いかと筆者等少数学生に尋ねる淡泊さが面白かった。

因に初年第二学期には文学書訳読を課せられるので (二回以後の学生の前半期間は初歩を再度聴講の形) 当時未だ良辞書絶無だし、下読には数日を要し困ったが、トルストイは「クロイツェルソナタ」、ゴーゴリは「恐ろしき復讐」、チャーホフは「犬を連れた婦人」に続いて、当時新進文人の「薔薇と十字架」や「ペテルブルク」に及んだ。後年筆者は九大で独自に「アンナ・カレーニナ」と「カラマゾフ兄弟」全篇は精読し、後者では有名邦訳の恐らく唯一的誤訳 (人称代名詞 *им* の取違へ) を発見する位になったが、文学書原語耽読は以後「父と子」にブーキン短編少許以外暇が無い実情である。

最後に露語等と同様、単位には言語学生にも認めぬ印度古典語に関して、榊亮三郎先生が唯一的大学院生 (宗教学の佐保田鶴治氏がかなりの習熟度に達してゐるのを梵字本文音読から察知した) が仲々止めないので、指導準備に取られる時間を慨嘆されたのと共に、同じく唯一人の印哲学生甲斐実行氏を相手に一身田から自家用車来学の常磐井堯猷博士のマハーラーチャ振は、羅馬字化自家校訂出版

の Atharva Veda の一部薄大判を只一回傍聴の筆者にも関接恵与されるのに感服した次第である。

以上は「筑紫路記」(『言語研究』59号, 新村出遺著刊行会『美意延年』昭和56年7月所収)に洩らした事共である。文典最古たる Pāṇini (波膩尼) の Aṣṭadhyaī (八卷蔵) の印度人による英訳第三回書が最近北米から出現した折柄, 邦文拙訳刊行も間近い機運だ。

Congratulatory Address from Prof. Dr. Werner Bahner
(Berlin, DDR)

In 1988 the Linguistic Society of Japan celebrates the 50th anniversary of its founding. On this occasion let me offer you my cordial congratulations. Within the 50 years of its existence, starting with 30 members under its first President, Prof. Izuru Shimmura, the Society has developed to a highly distinguished and notable association of linguists embracing 1,200 members today. It has achieved so much—not least also by “Gengo Kenkyu”, the semi-annual Linguistic Studies—for the spreading of knowledge of linguistics and thus for the recognition of our scientific work in Japanese society and on an international scale.

Let me wish you good luck and much success for the future activities of the Society for the benefit of linguistics.



Prof. Dr. Dr. h. c. W. Bahner
Vice-President of the Comité
International Permanent des
Linguistes
Berlin/DDR, August 1988

**Congratulatory Address from Prof. Dr. Wolfgang
U. Dressler (Wien)**

Zum 50-Jahr-Jubiläum Ihrer berühmten Gesellschaft gratuliere ich aufs herzlichste und beglückwünsche sie zu ihrem großen Beitrag zum exponentiellen Wachstum der japanischen Linguistik an Umfang und Qualität. Möge es ihr beschieden sein, auch in Zukunft die Geltung der japanischen Linguistik in der ganzen Welt zu festigen und im Sinne der internationalen Kooperation noch weiter auszubauen!

In Erinnerung an den schönen von Ihnen organisierten Kongreß in Tokyo,
grüßt Sie recht herzlich

A handwritten signature in black ink, appearing to read 'W. Dressler', written in a cursive style.

Wolfgang U. Dressler
Prof. für allgemeine Sprachwissenschaft an der
Universität Wien
Präsident der 12. Internationalen Linguisten-
kongreß (Wien 1977)
Herausgeber der *Folia Linguistica*

Congratulatory Address from Prof. Dr. Thomas

V. Gamkrelidze (Tbilisi)

Dear Mr President,

As Ex-President of the «Societas Linguistica Europaea» and on my own behalf I want to heartily congratulate the Linguistic Society of Japan on the 50th anniversary of its founding.

The Linguistic Society of Japan, which was founded in 1938 in Tokyo and started with only 30 members, has grown by now to the largest body of its kind with 1200 members (roughly the same as the Societas Linguistica Europaea), and just as the «Societas» it is contributing to further development of Linguistic Science. Furthermore, it bears witness to ever growing popularity of linguistics and the importance attached to the study of language in your country.

I wish the Linguistic Society of Japan further achievements and accomplishments in deepening our knowledge of Language.

Thomas V. Gamkrelidze

Thomas V. Gamkrelidze

Director of the Oriental Institute, Academy of
Sciences of the Georgian S. S. R.

Member of the U. S. S. R. Academy of Sciences,
Moscow

Honorary Member of the Linguistic Society of
America

Holder of the Lenin Prize

Editor of *Voprosy Jazykoznanija*

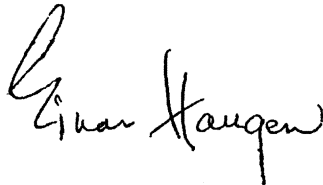
Congratulatory Address from Prof. Dr. Einar Haugen
(Harvard)

Dear Linguistic Society of Japan:

In response to your kind letter of June 7, informing me of the 50th anniversary of the Linguistic Society of Japan, I am happy to offer my warmest congratulations on the occasion. Back in 1938 the subject of linguistics was still badly defined, and it was in a spirit of progress that this society was founded. It was important that topics relating to language, philology, and sociolinguistics should be able to come together for discussion of common problems. The problem involved making a clear distinction between 'knowing languages' and 'knowing about languages.' While we wish that linguists should know as many languages as possible, we do not today identify anyone as a linguist unless he or she also understands the principles of general linguistics and tries to make his or her contribution to the field.

My own experience in Japan, both as a member of ELEC (English Language Educational Council) and as an attendant at the International Linguistic Congress in Tokyo, has cemented my connection with Japanese colleagues and with Japan. I hereby send you my heartiest good wishes on this occasion!

Sincerely and respectfully,


A handwritten signature in cursive script, reading "Einar Haugen". The signature is written in dark ink and is positioned to the right of the typed name.

Einar Haugen
Thomas Professor of Linguistics and Scandinavian,
Emeritus
Harvard University,
Cambridge, Massachusetts
(Home address: 45 Larch Circle, Belmont MA
02178)

**Congratulatory Address from Prof. Dr. André
Martinet (Paris)**

Dear Linguistic Society of Japan,

I would have been happy to attend the celebration of the fiftieth anniversary of the foundation of the Linguistic Society of Japan. May I express here my warmest congratulations and the hope that your Society will be thriving through the next fifty years and beyond?

A handwritten signature in black ink, appearing to read 'A. Martinet', with a long horizontal stroke extending to the right.

André Martinet
Emeritus professor
Université René Descartes and Ecole
des Hautes Études à la Sorbonne

Congratulatory Address from Prof. Dr. R. H. Robins
(London)

It gives me great pleasure to congratulate the Linguistic Society of Japan on the fiftieth anniversary of its foundation. During these years and especially since 1950 Japanese scholarship in linguistics has deserved and won worldwide recognition both in the field of Japanese language studies and in all branches of general linguistics and phonetics. A high point in the work of the Society and of all linguists in Japan was reached at the most successful International Congress of Linguists held in Tokyo in 1982, the first such Congress to be held in an Asian country. We look forward with confidence to the achievements of the Society in the future as distinguished as they have been in the past.

With warmest greetings,
Yours sincerely,

A handwritten signature in cursive script, appearing to read 'R. H. Robins', written in dark ink on a white background.

R. H. Robins,
Professor Emeritus of General Linguistics
in the University of London,
President of the Permanent International
Committee of Linguists.

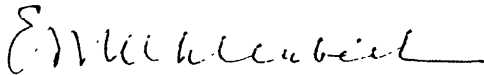
**Congratulatory Address from Prof. Dr. E. M. Uhlenbeck
(Leiden)**

Dear Members of the Linguistic Society of Japan,

On behalf of our organization I send you and your Society my most cordial congratulations with its 50th anniversary. Many of us followed over the years with sincere admiration the steady growth of the Linguistic Society of Japan, which has become the central rallying point of all linguistic studies in Japan.

We hope that under the inspired leadership of its president, Professor Tamotsu Koizumi, the Society and its journal *Gengo Kenkyu* will continue to play a central role in the further development of our discipline in your country.

Yours sincerely,



E. M. Uhlenbeck

Professor Emeritus, University of Leiden,
Secretary-General of the Comité International
Permanent des Linguistes

日本言語学会 (1938 ~ 1988) 略年譜

下宮忠雄 編

- 1938 (昭和13年) 2月27日19時より、東京、神田学士会館において発起人会を開く。座長 八杉貞利氏ほか 会合者 30名。本会の設立を決議、会則を作成。新村出氏を会長に推挙。新村氏の会長就任受諾、副会長 小倉進平氏以下16名の評議員、および5名の幹事を決定。評議員(五十音順): 市河三喜・伊波普猷・落合太郎・金田一京助・小林淳男・神保格・田中秀央・千葉勉・東條操・西脇順三郎・橋本進吉・福島(辻)直四郎・保科孝一・松本信広・八杉貞利・山田孝雄; 幹事: 高津春繁・木村彰一・小林智賀平・八木亀太郎・井筒俊彦の各氏。6月11日: 雑誌を『言語研究』と名づけ、年3回(各冊、約120頁)発行、三省堂から出版することに決定。会費: 維持会員 年額5円、普通会员 年額3円。昭和18年まで同額。会計報告(9月30日現在) 収入2,107円、支出186円、差引残高1,921円。(以下、円未満切捨て) 事務所: 東京帝国大学文学部言語学研究室。
- 1939 (昭和14年) 1月25日『言語研究』第1号発行、145頁、1円20銭。(この号に、千葉勉氏による国際言語学会 *Le Congrès International de Linguistes* [今日では国際言語学会とよぶ; フランス語は、*Le Congrès International des Linguistes* と改められた] についての、かなり詳しい紹介がある)。4月20日『言語研究』第2号発行、126頁、1円20銭。9月25日、同第3号発行、119頁、1円20銭。12月30日、同第4号発行、109頁、1円20銭。
- 1940 (昭和15年) 5月15日『言語研究』第5号発行、112頁、1円20銭。(この号の会則に、一時に金百円以上を納めた者は以後会費を要しない、とある) 会員名簿あり。会員数305名、うち、維持会員77名、名誉会員2名(白鳥庫吉、高橋順次郎の両氏)。11月10日『言語研究』第6号発行、117頁、1円20銭。
- 1941 (昭和16年) 4月30日『言語研究』第7・8号発行、192頁、2円。5月

10日：坂本記念会文化事業部より金5,000円（ただし、昭和16年より毎年1,000円ずつ）の寄付をうけることに決定。ちなみに、昭和15年の会計報告は収入1,599円、支出2,222円、差引残高-623円。12月25日『言語研究』第9号、124頁、1円20銭。このころ、彙報に応召出征・防空訓練のことなどがでる。

1942（昭和17年）11月30日『言語研究』第10・11号発行、221頁、2円40銭。

1943（昭和18年）3月30日『言語研究』第12号発行、114頁、1円20銭。同第13・14・15合併号、三省堂にて印刷完了、製本準備中に戦災のため焼失。

1944（昭和19年）『言語研究』休刊。

1945（昭和20年）『言語研究』第16号編集終了、文求堂に依頼、同第17号（故小倉進平前副会長追悼号）編集中、戦火激しくなり、いずれも出版に至らなかった。

1946（昭和21年）5月18日、終戦後初の大会、第8回大会が東京大学で開催され、中島文雄・魚返善雄両氏の講演あり。

1947（昭和22年）第9回大会、慶応義塾大学にて、西脇順三郎・安藤正次両氏の講演あり。

1948（昭和23年）第10回大会、京都大学にて、野上素一・吉川幸次郎・泉井久之助3氏の講演あり。

1949（昭和24年）6月15日『言語研究』第13号発行、64頁、非売品。この号より奥付に定価の記載なく、編集者 金田一京助、発行者 日本言語学会（代表者 服部四郎）、印刷者 太平印刷社とあり。11月25日『言語研究』第14号発行、ガリ版、116頁。この号の日本言語学会会則に、会費年額 何円也の記載なし。以後、今日に至るまで同様。昭和24年11月現在の役員：会長 新村出、副会長 金田一京助、評議員：服部四郎（兼幹事長）・辻直四郎（会計担当）ほか、浅井恵倫・安藤正次・泉井久之助・市河三喜・落合太郎・神田盾夫・高津春繁・小林淳男・神保格・田中秀央・千葉勉・東條操・西脇順三郎・松本信広・八杉貞利・山田孝雄、幹事：池上二良・井筒俊彦・大東百合子・小林智賀平・柴田武・三根谷徹の各氏。

1950（昭和25年）4月30日『言語研究』第15号発行、ガリ版、108頁。昭和25

- 年度会費（16・17・18号誌代を含む）400円。会員名簿あり。会員数282名。
 奥付記載：編集兼発行者 日本言語学会（代表者 新村出）、印刷所 欧明社。
 8月5日『言語研究』第16号発行、故小倉博士追悼号、ガリ版、164頁。
- 1951（昭和26年）3月20日『言語研究』第17・18号発行、ガリ版、188頁。
 6月9日：第22回国際東洋学会議（於イスタンブール）への派遣代表に金田一京助氏を推薦。10月7日：東京例会が発足し、原則として、毎月第1土曜日。第1回 徳永康元氏「ハンガリー語の母音調和」、第2回 大野晋氏「古代日本語の母音調和」、第3回 柴田武氏「チュルク語の母音調和」、第4回 池上二良氏「ツングース語の母音調和」、河野六郎氏「朝鮮語の母音調和、および母音調和一般」などの発表あり。12月25日『言語研究』第19・20号発行、ガリ版、203頁。
- 1952（昭和27年）3月31日『言語研究』第21号発行、ガリ版、71頁。昭和25年度決算報告：収入210,923円（前年度繰越金31,076円を含む）、支出210,923円（印刷費125,000円、次年度繰越金30,167円を含む）。有坂秀世氏、『国語音韻史の研究』（昭和19年）で、学士院賞受賞。4月5日、第7回国際言語学会議（9月、ロンドン）に、本学会代表として、滞英中の亀井孝氏を推すことに決定。
- 1953（昭和28年）3月31日『言語研究』第22・23号発行、138頁。これより活字印刷。扉に安藤正次教授永眠の弔辞あり。巻末に『言語研究』掲載論文総目録（1号～11号）。昭和26年度会計報告：収入234,896円、支出205,302円、差引残高29,594円、印刷所が研究社印刷株式会社となる。10月15日『言語研究』第24号発行、64頁。新役員：委員長 服部四郎、編集委員 泉井久之助・井筒俊彦・川本茂雄・高津春繁・河野六郎・小林英夫・服部四郎、出版委員 三根谷徹・山本謙吾の各氏、ほか。昭和28年度より学生会費制度あり：普通会員年500円のところ、学生は2割引きの400円。身分証明書必要。大学院学生には適用されず。昭和27年度会計報告：収入220,373円、支出230,330円、差引残高-9,957円、表紙p.3に『言語研究』掲載論文総目録（12号～21号）あり。
- 1954（昭和29年）3月31日『言語研究』第25号発行、88頁。会員名簿あり。

会員数 339 名。表紙 p.3 にバックナンバー在庫案内、22・23号、24 号の論文題目あり。12 月 25 日『言語研究』第 26・27 号発行、198 頁。巻頭に「金田一京助博士の業績——文化勲章受章の栄を祝して」の祝辞あり。昭和 28 年 10 月、辻直四郎氏、日本学士院会員に当選。昭和 29 年 5 月 18~25 日、柳田国男・金田一京助・時枝誠記・泉井久之助・服部四郎の 5 氏は、宮中において言語学に関して御進講。昭和 28 年度会計報告：収支とも 264,952 円。

1955 (昭和 30 年) 10 月 20 日『言語研究』第 28 号発行、100 頁。新委員：委員長 服部(四)、編集委員長 小林(英)の両氏、ほか。委員長は任期 2 年、三選を認めず、編集委員長は任期 2 年、再選を認めず。昭和 29 年度会計報告：収入 283,106 円、支出 291,992 円、差引残高 -8,886 円。

1956 (昭和 31 年) 3 月 31 日『言語研究』第 29 号発行、72 頁。昭和 31 年度より『言語研究』の発行部数を 550 部とすると記述あり。9 月 30 日『言語研究』第 30 号発行、116 頁。表紙 p.3 に投稿規定が掲載される。昭和 30 年度会計報告：収入 267,609 円、支出 278,211 円、差引残高 -10,602 円。

1957 (昭和 32 年) 3 月 31 日『言語研究』第 31 号発行、78 頁。巻頭に「文化勲章を受けられた新村出博士を祝う」の祝辞あり。委員長 高津、編集委員長 服部(四)の両氏。8 月、オスロで開催される第 8 回国際言語学学会議に本会代表として 泉井久之助氏、千葉勉氏が推薦される。12 月 31 日『言語研究』第 32 号発行、150 頁。巻頭に「山田孝雄博士の文化勲章受章を賀す」の祝辞あり。第 8 回国際言語学学会議 (8.5. ~9., オスロ) についての泉井久之助氏による報告あり。昭和 31 年度会計報告：収入 310,867 円、支出 313,421 円、差引残高 -2,554 円。

1958 (昭和 33 年) 3 月 31 日『言語研究』第 33 号発行、74 頁。この号までは、大会発表の氏名と題目が目次に掲載され、バックナンバー番号前からの論文題名が紹介されている。6 月と 7 月に、東京大学文学部において、J. Whatmough “Mycenaean Greek”, N. Poppe 「アルタイ諸言語比較研究の方法論について」の臨時講演会あり。10 月 30 日『言語研究』第 34 号発行、98 頁。昭和 32 年度会計報告：収入 322,400 円、支出 344,377 円、差引残高 -21,977 円。印刷所が東光印刷株式会社になる。昭和 33 年 11 月、会員数 503

名。

- 1959 (昭和34年) 3月31日『言語研究』第35号発行, 130頁。10月20日, 同第36号発行, 80頁。昭和33年度会計報告: 支出407,722円(以下, 収入省略)。5月3日, 江実・西田龍雄の両氏, 学士院賞を受賞。委員長 高津, 編集委員長 小林(英)の両氏。
- 1960 (昭和35年) 3月31日『言語研究』第37号発行, 82頁。9月30日, 同第38号発行, 162頁。38号より, 印刷所は三省堂ミタカ工場となる。第1回国際方言学会(8月, ベルギー)に本学会代表として吉町義雄・柴田武両氏が推薦される。昭和34年度会計報告: 支出268,483円, 差引残高-13,922円。
- 1961 (昭和36年) 3月31日『言語研究』第39号発行, 59頁。9月20日, 同第40号発行, 92頁。36年度より会費年額700円, 学生500円, 海外\$3に改められる。委員長 服部(四), 編集委員長 泉井の両氏。昭和35年度会計報告: 支出387,067円。
- 1962 (昭和37年) 3月30日『言語研究』第41号発行, 105頁。10月31日, 同第42号発行, 83頁。41号より印刷所は研究社印刷となる。昭和37年度より普通会費年額1,000円(学部学生800円), 海外会員\$4となる。昭和36年度会計報告: 支出465,847円, 差引残高-38,154円。第9回国際言語学者会議(8.27.~31. M. I. T., ケンブリッジ)に, 本会代表として小林英夫氏が参加。
- 1963 (昭和38年) 3月1日『言語研究』第43号発行, 78頁。10月16日, 同第44号発行, 80頁。同号に小林英夫氏「第9回国際言語学者会議に出席して」あり。38・39年度の委員長 服部四郎, 編集委員長 河野六郎の両氏。昭和37年度会計報告: 支出496,319円, 差引残高9,749円。5月18日, 新村出会長より荒木文部大臣にアジア・アフリカ言語文化研究センター設立に関する要望書を提出。
- 1964 (昭和39年) 3月30日『言語研究』第45号発行, 103頁。11月20日, 同第46号発行, 86頁。バックナンバーの価格は, 在庫分は1冊500円(\$2), 合併号は1,000円(\$4)。昭和38年度会計報告: 支出552,033円, 差引残高7,954円。

- 1965 (昭和40年) 3月31日『言語研究』第47号発行, 80頁。11月30日, 同第48号発行, 85頁。第8回国際人類学・民族学会議 (1968, 日本) の準備委員会に, 本会より泉井久之助・服部四郎両氏が推薦された。同会議は, 1968年9月3日~10日, 東京・京都, 参加者1,300名 (国内500名, 国外800名), 運営経費3,500万円, 準備委員会委員長 須田昭義氏, 事務局は東京大学総合研究資料館内アンデス調査室。昭和40年度文部省刊行補助金は, 責任頁数224頁の年度内刊行が不可能のため 刊行計画を変更し, 再申請の結果 (内定額6万円), 年間160~180頁の範囲にする。昭和39年度決算: 支出583,701円, 差引残高17,855円。
- 1966 (昭和41年) 3月31日『言語研究』第49号発行, 120頁。刊行時期を従来より繰り上げ, 今後は, 第1冊を9月中に, 第2冊を12月中とすることを目指す。会員名簿は原則として3年に1回発行する。昭和41年11月, 会員数710名。
- 1967 (昭和42年) 1月20日『言語研究』第50号発行, 136頁。昭和40年度決算: 支出709,494円, 差引残高8,547円。3月30日『言語研究』第51号発行, 101頁。第10回国際言語学会議 (1967, ブカレスト) への学会代表として泉井久之助氏を確認。8月30日, Comité International Permanent des Linguistes (略称, CIPL) の会議において, その Executive Committee のメンバーに服部四郎氏が選出される。
- 1968 (昭和43年) 1月31日『言語研究』第52号発行, 128頁。(この号より印刷所は精興社)。昭和42・43年度: 委員長 高津春繁, 編集委員長 河野六郎の両氏。新村出会長逝去 (1967.8.17.) にともない, 金田一京助氏が会長に就任。奥付の表示が編集兼発行者 日本言語学会 (代表者 金田一京助) となる。3月31日『言語研究』第53号発行, 127頁。5月25日, CIPLからの国際言語学会議日本開催の要請については断わることにした。
- 1969 (昭和44年) 1月20日『言語研究』第54号発行, 故新村出会長追悼号, 109頁。写真, および 金田一京助・泉井久之助・浅井恵倫・小林英夫・田中秀央・浜田敦・吉町義雄の各氏による 弔辞あり。3月31日『言語研究』第55号発行, 132頁。大会の公開講演者謝礼を3,000円に決めた。委員長 柴

田武, 編集委員長 徳永康元の両氏。

- 1970 (昭和45年) 1月31日『言語研究』第56号発行, 104頁。3月31日, 同第57号発行, 80頁。4月1日より学会事務局が東京大学言語学研究室から東京都千代田区の大修館ビル内に移転。6月20日, 国際言語学会議を1977年に日本で開催できるか否かを検討する小委員会(可能性検討委員会)を設置。そのメンバーは, 泉井久之助・亀井孝・小林英夫・江実・柴田武・鈴木孝夫・服部四郎の7氏。昭和45年12月, 会員数877名。
- 1971 (昭和46年) 1月25日『言語研究』第58号発行, 112頁。奥付の表示変更: 発売 大修館書店, 定価750円。印刷所が近藤印刷となる。昭和44年度会計報告: 支出998,791円, 差引残高2,285円。バックナンバー(33号~57号)収録論文・定価一覧あり。3月30日『言語研究』第59号発行, 92頁, 定価750円。12月25日, 同第60号発行, 104頁, 定価850円。昭和46・47年度役員: 委員長 高津春繁, 副委員長 河野六郎, 編集委員長 川本茂雄の各氏。奥付変更: 編集・発行 日本言語学会(代表者 高津春繁)。12月27日, 第11回国際言語学会議(1972, ポローニャ)への本会からの代表を野上素一氏に委嘱することに決定。
- 1972 (昭和47年) 3月30日『言語研究』第61号発行, 98頁, 定価850円。12月31日, 同第62号発行, 故金田一京助会長追悼号, 114頁, 定価1,000円。巻頭に, 写真, および高津春繁・辻直四郎・小林英夫・泉井久之助・田辺正男・見坊豪紀の各氏による弔辞あり。第11回国際言語学会議(1972, ポローニャ)についての報告(野上素一・菅田茂昭の両氏)。国際言語学会議(1977)日本招致の可能性検討委員会(委員長 江実氏, CIPL 実行委員 服部四郎氏, ほか5名)は「財政的・事務的等の点で日本での開催の見込みがあるという結論に達した」。
- 1973 (昭和48年) 3月31日『言語研究』第63号発行, 114頁, 定価1,000円。11月30日, 同第64号発行, 故高津春繁博士追悼号, 136頁, 定価1,000円。巻頭に, 辻直四郎・風間喜代三両氏による弔辞あり。昭和48・49年度役員: 委員長 柴田武, 編集委員長 北村甫の両氏。奥付: 日本言語学会(代表者 柴田武)となる。

- 1974 (昭和49年) 3月31日『言語研究』第65号発行, 92頁, 定価1,000円。
 昭和47年度会計報告: 支出1,514,719円, 差引残高-175,907円。会費年額2,000円を昭和49年度より3,000円(海外会員US\$14.00)に改定。12月25日『言語研究』第66号発行, 136頁, 定価1,500円。10月12日, 1977年の国際言語学会議は日本に招致しないことになった。昭和49年10月より, 公開講演者への謝礼は, 会員5,000円, 非会員10,000円となる。昭和49年12月, 会員数934名。
- 1975 (昭和50年) 3月31日『言語研究』第67号発行, 94頁, 定価1,500円。
 3月31日, 常任委員会: 第12回国際言語学会議は, 1977年8月, ウィーンで開催されると野上素一氏(CIPL総会日本代表)から報告があり, CIPL執行委員の服部四郎氏がこれを確認。新会則による会長選挙の結果, 服部四郎氏が会長に選ばれた。任期2年。編集委員長 柴田武氏, 常任委員 池上二良氏ほか7名, 委員総数67名。会費納入は銀行振込または郵便振替のみとし, 現金書留の受入れは廃止する。ただし, 大会当日の現金による会費納入は受付ける。12月25日『言語研究』第68号発行, 140頁。奥付表示: 編集・発行 日本言語学会会長 服部四郎。雑誌の定価の記入がなくなり, かわりに「昭和50年度会費年額3,000円, 在外会員はUS\$14.00」と奥付にあり。公開講演者への謝礼は, 会員5,000円を10,000円に, 非会員10,000円を20,000円に増額することになった。ただし, 会長就任講演には謝礼を出さない。大修館内事務所が6月末で無人化した。事務局は東京都新宿区西新宿の東京言語研究所内。
- 1976 (昭和51年) 3月31日『言語研究』第69号発行, 86頁。昭和49年度会計報告: 支出2,859,536円, 差引残高452,147円。CIPLへの寄付金を年額\$200とする。11月30日『言語研究』第70号発行, 114頁。『言語研究』第2号より第67号までのバックナンバー4千数百冊が東京大学文学部言語学研究室に保管されていたが, それを全部, 本学会のパーマネント・アドレスである大修館書店内事務所に移すことに常任委員会において決定し, 移送および必要な処置を完了(昭和50.12.~51.4., その後, 昭和60年4月, 三省堂への事務局移転に際し, バックナンバーは三省堂書店外商部に移管, 以後

ここがバックナンバーの発売所となる)。昭和51年12月、会員数984名。

- 1977 (昭和52年) 3月31日『言語研究』第71号発行, 102頁。第30回国際アジア・北アフリカ人文研究会議(旧称: 国際東洋学会議)(1976. 8. 3. ~8., メキシコシティ)について, 日本学術会議から派遣した江実氏による報告あり。10月31日『言語研究』第72号発行, 121頁。第12回国際言語学会議(1977, ウィーン)への本会からの代表は, 選挙の結果, 服部四郎氏に決定(1976. 12. 18.)。昭和52・53年度会長選挙の結果, 泉井久之助氏に決定。常任委員4名, 編集委員長 西田龍雄氏。学会事務局: 京都産業大学, 主務者は岩本忠氏。昭和51年度会計報告: 支出6,092,643円(次期繰越2,470,626円を含む)。奥付: 編集・発行 日本言語学会会長 泉井久之助。
- 1978 (昭和53年) 3月31日『言語研究』第73号発行, 105頁。昭和53年度より会費を500円値上げし, 国内会員3,500円, 海外会員US\$16(数年来の支出増大額は年平均50万円, 来年度も同額の支出増が見込まれる。この50万円を会員数1,000で割れば500円となる)。10月5日逝去の小林英夫氏(1903~1978)のために, 同年10月14日, 関西外国語大学での委員会および翌日の総会で1分間の黙禱が捧げられた。10月31日『言語研究』第74号発行, 135頁。第12回国際言語学会議(1977. 8. 29. ~9. 2., ウィーン)について服部四郎氏による報告あり。昭和52年度会計決算: 支出6,025,872円(次期繰越2,628,004円を含む)。1978年11月, 会員数1,052名。
- 1979 (昭和54年) 3月31日『言語研究』第75号発行, 118頁。昭和54・55年度会長選挙の結果, 最高点者の辞退により, 次点者の西田龍雄氏に決定。常任委員5名, 編集委員長 北村甫氏。11月30日『言語研究』第76号発行, 110頁。奥付: 編集・発行 日本言語学会会長 西田龍雄。事務局: 京都大学文学部言語学研究室内。昭和53年度決算: 支出6,871,569円(次期繰越1,138,238円を含む)。文部省刊行助成金(昭和54年度)が, 53万円から60万円に増額と内定。10月13日, 天理大学での常任委員会および翌日の総会で故辻直四郎氏(1899~1979)の冥福を祈って黙禱が捧げられた。
- 1980 (昭和55年) 3月31日『言語研究』第77号発行, 120頁。「故辻直四郎先生」(風間喜代三氏)の弔辞あり。9月30日『言語研究』第78号発行, 166

頁。昭和54年度決算：支出5,830,029円（次期繰越1,579,769円を含む）。7月19日、昭和55年度第2回常任委員会：第13回国際言語学会議（1982；東京）について、同会議準備小委員会の北村甫氏より、開催の形式、運営組織、事務局（学習院大学に置く）、経費（参加者1,000人、予算規模4,400万円とし、収入の60%を参加費、40%を寄付金に頼るものとする）について、井上和子氏よりプログラムの説明があった。常任委員会から、言語学会の組織全体から組織委員会に人材を供給することが望ましいとの意見が出された。これより先、1979年12月23日、東大の学士会館分館において打合せ会が行なわれたが、その参加者は、服部四郎・北村甫・大東百合子・西田龍雄、協賛6学会を代表して、中島文雄（日本英文学会）・岩崎英二郎（日本独文学会）・三宅徳嘉（日本フランス語フランス文学会〔欠席〕）・平山輝男（国語学会）・鐘ヶ江信光（中国語学会）・渡辺修（計量国語学会）、幹事として、長谷川欣佑・国広哲弥・池上嘉彦・中本正智・長嶋善郎・下宮忠雄の各氏であった。1980年4月28日、30日、5月2日の3日間、上野の日本学士院で、CIPL 会長 Robert H. Robins (London)、CIPL 事務総長 E. M. Uhlenbeck (Leiden) と日本側準備小委員会（このとき、井上和子・松浪有・奈良毅の3氏も加わった）との会合が行なわれ、第13回会議の会長に服部四郎、事務総長に井上和子の両氏が決定した。1980年10月、第1回案内（first circular）を前回ウォーン会議（1977）参加者1,400名、日本言語学会会員1,200名、世界主要学術団体200か所に発送。1980年10月18日、京大会館で行なわれた昭和55年度第2回委員会で、上記会議の日本言語学会主催を決定。1980年11月、会員数1,185名。

1981（昭和56年）3月31日『言語研究』第79号発行、150頁。昭和56・57年度会長選挙の結果、最高点者の辞退により、次点者の川本茂雄氏に決定。常任委員4名、編集委員長 堀井令以知氏。11月30日『言語研究』第80号発行、178頁。昭和55年度決算：支出6,504,620円（選挙関係等準備積立金200,000円、次期繰越743,360円を含む）。奥付：編集・発行 日本言語学会会長 川本茂雄。事務局：早稲田大学語学教育研究所内。事務局主任は田村すゞ子氏。巻末に第13回国際言語学会議案内（1981年9月）が付せられ、それによ

ると、主催は日本言語学会、会長は服部四郎、副会長は泉井久之助・西田龍雄・川本茂雄、事務総長は井上和子の各氏、ほか、委員約30名。参加申込者980名（うち、日本から470名）。日本言語学会会費は、昭和56年度より年額5,000円、在外会員はUS\$25.00または6,000円。

1982（昭和57年）3月30日『言語研究』第81号発行、147頁。巻末に第13回国際言語学会議の準備状況と後援会入会のお願いについて、ICL事務総長の井上和子氏の報告とアピールあり。9月30日『言語研究』第82号発行、186頁。この号より、ISSN（International Standard Serial Number）が表紙p.1頭部に載せられる。大会開催校一覧（昭和21年以後）あり。昭和56年度決算：支出7,959,539円（選挙関係等準備積立金1,000,000円、次期繰越1,541,412円を含む）。昭和57年度の会費、年額6,000円、在外会員は7,500円。

第13回国際言語学会議（The XIIIth International Congress of Linguists）は、1982年8月29日から9月4日まで東京の日本都市センターで開催され、参加者1,338名（うち、海外から320名）を得て成功裡に終了した。開始直前の3か月間に参加者が急速に増えたため、財政的な問題は解決した。この会議報告（日本言語学会代表の国広哲弥氏）が『言語研究』第83号に載った。1983年の国際アジア・北アフリカ研究会議に本会が協賛することになった。1982年11月、会員数1,263名。

1983（昭和58年）2月28日『言語研究』第83号発行、174頁。昭和58・59年度会長選挙の結果、井上和子氏に決定。常任委員4名、編集委員長 松本克己氏。事務局長 村木正武氏。奥付：編集・発行 日本言語学会会長 井上和子。事務局：国際基督教大学。5月28日逝去の元会長 泉井久之助氏（1905～1983）の冥福を祈って、6月11日、昭和58年度第1回委員会において黙禱が捧げられた。11月15日『言語研究』第84号発行、238頁。泉井久之助氏の写真と、西田龍雄・関本至・堀井令以知3氏による弔辞あり。これ以後、表紙に故……追悼号の記載なし。昭和57年度決算：支出9,995,778円（選挙関係等準備積立金600,000円、次期繰越2,145,652円を含む）。8月1日、前会長 川本茂雄氏（1913～1983）逝去。その冥福を祈って10月15日の委員

会で黙禱。元会長 服部四郎氏が11月3日文化の日に、永年にわたる日本の言語学の発展に尽くした功績により文化勲章を受賞したので、その祝賀会(発起人代表、井上和子氏)が、12月10日、東京会館で開催された。

- 1984 (昭和59年) 3月31日『言語研究』第85号発行, 222頁。川本茂雄 前会長の写真, および井上和子・古川晴風・遠山一郎3氏による甲辞あり。12月1日『言語研究』第86号発行, 212頁。国際アジア・北アフリカ研究会議国内委員会への本会の代表として池上二良氏が選出された。昭和58年度決算: 支出9,962,186円(選挙関係等準備積立金1,000,000円, 次期繰越1,868,807円を含む)。第20回国際音声言語医学会が昭和61年8月3日~7日に東京で開催されることになり, 本会は協賛者となることになった。
- 1985 (昭和60年) 4月1日『言語研究』第87号発行, 192頁。制度検討委員会(委員長 小泉保氏)からの会則修正案が可決されたことにより, 昭和60年4月1日より役員任期は3年になった。現在の評議員はそのまま留任, 副会長は顧問と改称して留任する。昭和60・61・62年度会長選挙の結果, 国広哲弥氏に決定した。事務局長 上野善道氏, 常任委員7名, 編集委員長 小泉保氏。12月25日『言語研究』第88号発行, 224頁(うち, pp.147~224は会員名簿および会則, 会員数1,181名)。奥付: 編集・発行 日本言語学会 会長 国広哲弥。なお, この年より事務局が三省堂内に移り, 以後, パーマネント・アドレスとなる。また, 『言語研究』の発売も, 創刊当時と同じ三省堂となる。『言語研究』誌の体裁の変更: 邦文目次を表紙p.1に印刷する; 号数表示を漢数字からアラビア数字に変える; おもて表紙と背に発行年月を入れる; 表紙のはみ出しを切り落とす, ほか。昭和59年度決算: 支出10,704,135円(次期繰越3,306,984円を含む)。9月以降, 会費納入・入会手続・住所変更連絡等が日本学会事務センターを通して行われることになった。
- 1986 (昭和61年) 3月25日『言語研究』第89号発行, 152頁。第14回国際言語学者会議(1987, 東ベルリン)の中心テーマは「Humboldt と現代言語学」に決定した(CIPLの実行委員は井上和子氏)。12月25日『言語研究』第90号発行, 248頁。特集: シンポジウム「能格性をめぐって」(オーガナイザー 松本克己氏)あり。昭和60年度決算: 支出10,621,892円(次期繰越

3,561,853円を含む)。

- 1987 (昭和62年) 3月25日『言語研究』第91号発行, 144頁。第14回国際言語学会議への学会代表者として松本克己氏が選出された。12月25日『言語研究』第92号発行, 195頁。第14回国際言語学会議(8.10.~15., 東ベルリン)について松本克己氏の報告あり。6月6日, 日本女子大での委員会で池上二良氏から第32回国際アジア・北アフリカ研究会議について報告あり。上野善道氏が海外出張のため, 昭和62年4月から菊地康人氏が事務局長に就任。昭和62年度決算: 支出12,777,550円(次期繰越4,523,404円を含む)。12月『日本言語学会会員名簿, 付: 会則・事務手続案内等』131頁+21頁(会員数1,227名)。
- 1988 (昭和63年) 3月25日『言語研究』第93号発行, 239頁。特集: シンポジウム「社会言語学の理論と方法」(コーディネイター 井上史雄・井出祥子の両氏)あり。昭和63・64・65年度会長等選挙の結果, 小泉保氏が会長に決定した。事務局長 近藤達夫氏, 常任委員9名, 編集委員長 下宮忠雄, 会計監査委員 梅田博之・南不二男の各氏。委員総数67名。

言語研究

第一號

日本言語學會編輯

三省堂發行

目 次

	頁
創刊にあたりて	新村 出 1—4
鴨と哉	柳田 國男 1
ソシユールの言語理論について	神 保 格 18
文獻學・言語學・語源學	福島 直四郎 38
突厥語における數詞の組織について	泉井 久之助 54
<i>Φασιμῆρος</i>	高 津 春 繁 59

新刊紹介・學界彙報

ゾムメルフルト氏の「言語と社會」(72)——L. R. Palmer, *An Introduction to Modern Linguistics*. (76)——ツィップの動態言語學(79)——*エシニア*ニノツ氏「言語新説」(91)——Richard Höningwald, *Philosophie und Sprache. Problemkritik und System*. (94)——*Encyclopédie Française, Tome I (Outillage Mental): Partie II: Le Langage* (Sous la direction de: A. Meillet). (95)——*Bulletin de l'Académie des Sciences de l'URSS*. (97)——ロズィツィウシ「音韻學序説」(98)——金田一京助博士著「國語史系統篇」——小林好日「日本文法史」(106)——*Die Eurasische Sprachfamilie. Indogermanisch, Koreanisch und Verwandtes*. von Dr. Heinrich Koppelman. (116)——ラルス版廿世紀佛蘭西文法(120)——F. Ranke: *Altnordisches Elementarbuch*. (125)——Karl Larm: *Den bestämda artikeln i äldre fornsvenska*. (126)——René Dussaud: *Les découvertes de Ras Shamra et l'Ancient Testament*. (128)——Alan H. Gardiner: *Some Aspects of the Egyptian Language*. (131)

國際言語學會の組織と使命 (137)——第三回國際音聲學大會 (141)——日本語學會會報 (142)

日本語學會會則 1) 本會は日本語學會と稱する。 2) 本會は言語の研究と其の普及とを圖り、兼ねて會員相互の親睦を厚くするを以て目的とする。 3) 本會は次の事業を行ふ。 a) 諸種の會合 b) 雜誌の刊行 c) 其の他必要な事業。 4) 本會の經費は會費及び特別の寄附金を以て之にあてる。但し毎年一回雜誌の上に於て會計報告をする。 5) 本會の趣旨に賛成し、會費一年分以上を前納する者を以て會員とする。 6) 會員は次の三種とし、雜誌の頒布を受ける。 a) 名誉會員 b) 維持會員 會費年額五圓を納める者 c) 普通會員 會費年額三圓を納める者。 7) 本會は次の役員を置く。會長一名 副會長一名 評議員若干名 幹事若干名 但し幹事の任期は二年とする。 8) 本會は事務所を東京帝國大學文學部言語學研究室内に置く。



創刊にあたりて

言語研究がこゝ數年來とみに熱度を加へ來つたことは何人も認めるところであり、又それは文化史的に見ても興味ある現象といはねばならぬ。専門の言語學徒は勿論のこと、哲學者・心理學者・社會學者・民俗學者等が申し合せたやうに言語現象に彼等の視線を向けて來た。それによつて數多くの事象が発見せられ、理論も亦相當に闡明されたことは周知の如くである。

然るに皆人の等しく遺憾としたことは、我が國に於て言語研究自體を目的とせる雑誌の缺けてゐたことである。先進の歐米諸國にあつては何れも専門誌三四種以上をもたぬ國はない。この點、我々は全く學術上後進國なみの待遇を受けても文句がいへなかつたのである。

即ち氣運は徐々に熟して來た。かくて我々は本年五月同學者相集まり、「日本言語學會」なるものを結成し、その主要事業の一として機關雑誌の發行が決議されたのである。

願れば十九・二十の世紀交代のみぎり、歐米の比較言語學がその新鮮な芳香をもつて我が國に輸入紹介せられつゝあつた頃ほひ、「言語學雜誌」の創刊を見たことがあつた。その卷を重ねること僅かにして廢絶の餘儀なきに至つたことは、當時は機運未だ熟さなかつたのだと云ふ感を今日の我々に與へずにはゐない。

爾來三分の一世紀は音なくして過ぎた。その間學徒の努力と功果は漸次堆積されて來た。探求の分野もまた著しく擴大された。或は理論に、或は事實の調査に、例せば言語哲學・言語心理學・言語美學・言語社會學・比較言語學・音聲學、各種言語に於ける言語史並びに言語地理學等、その多くは前代の學者の夢想だもしなかつた領域である。

我々の企圖するものは、言語研究を自己目的とするところの純粹の學術雜誌である。實踐的顧慮によつて論述の體を歪められることなく、一學派一運動の宣傳誌に傾くことなく、あくまでもその學問的價值に基準をおくところの論作を收載する雑誌である。名付けて「言語研究」と稱することにした。

刊行の次第は、當分のうち年三回、都合三冊の冊子を出して行きたいと思ふ。内容は論文及び書評に重きをおき、併せて内外學界の消息、本會關係記事等を收める。尙ほ我が國學徒の研究事績、殊にも東洋語學に關するそれを、はたまた我が國の言語研究の情勢一般を、海外の學界に發表し、以て日本文化の世界文化への一寄與たらしめんが爲に、隨時歐文の論説を收録することにも努力を拂はうと思ふ。

我々は理解ある會員諸氏の熱烈なる支援を期待してやまない。

昭和十三年十月

日本言語學會會長 新 村 出

Introductory Note

It is an accepted fact that linguistic study has recently gained more enthusiastic adherents than ever, a fact which is extremely significant from the historical point of view. Curiously enough, not only specialists in the study of language, but also scholars in philosophy, psychology, sociology, ethnology and other sciences have begun to turn their attention to that study language. It is universally known that, owing to these favourable circumstances, many new facts have been discovered and theoretical study is also pursued with considerable zeal and assiduity.

To our regret, however, no periodical entirely devoted to linguistic science existed in Japan for the last thirty years, while almost every country in Europe and America can boast more than one of this kind.

The desire for such a periodical having been increasing these several years, the scholars of our country interested in the study of language met in May of this year to organize the "Linguistic Society of Japan," one of the chief objects of which is the publication of this journal.

This is not the first time that the publication of this kind has been attempted, for at the end of the last century, when the newly born comparative linguistics was in the process of being introduced into Japan with all its youthful vigour, the "Gengogaku-zasshi" was published by a few ardent linguists, but, unfortunately, it had to be discontinued after several volumes. Recollecting now these remote days we can not but realize that the time was not yet ripe for such an ambitious enterprise.

More than a third of a century has since passed while we were amassing intangible fruits of our continuous efforts. Meanwhile, the domains of linguistic science have been remarkably enlarged in the researches both in theories and in facts. Philosophy, psychology, aesthetics and sociology of language have made a considerable progress, while the material side of the study, for example, phonetics and comparative,

historical and geographical studies of individual and related languages have all come out of their infancies. Almost all of them were novel features of linguistics, not dreamed of by our linguists of the preceding generation. Consequently, it is only natural that a second attempt should have been made to issue a new journal devoted to the study.

The object of this new journal, the "Gengo-kenkyu," is purely scientific; it has as its sole aim the study of language, so that it take up only such treatises, of intrinsic value as are neither influenced by any consideration of extraneous movements nor circumscribed by any sectarian or propagandist biases.

For the time being, the journal is to be published three times a year, and although our chief object lies in giving reviews of the more important of new publications as well as treatises, we shall not neglect occasionally to reports the general trends of the study both at home and abroad. We shall likewise print the Proceedings of the Society. Moreover, we shall endeavour to make our achievements known, especially those in oriental languages. With this in view, we expect to publish essays written in European languages in addition to those in Japanese, at intervals, so that our linguistic researches may contribute something to world culture and scholarship.

May the members extend their helping hands to the Society and cooperate in the furtherance of our common end.

Kyoto,
October 1938,

Izuru Shimmura,
President.

國際言語學會の組織と使命

此學會の正式な名稱は Le Congrès International de Linguistes といい、一九二八年ヘーグに開かれた第一回の會議で結成されたものである。此會には十一名より成る最高幹部があつて其活動を指揮してゐるが此幹部會を Le Comité International Permanent de Linguistes (CIPL) 即ち常任理事會ともいふべく其顔觸れは何れも言語學界の元老株、この會については全責任を負うてゐるわけである。そして常任理事なるが故に一度選任さるれば永久的の性質を帯びるわけではあるが、個人々々の都合によつて之を辭することの出来るのは無論である。現にジュネーヴに開かれた第二回大會まで常任理事であつたものが其後間もなく或事情の爲に辭任し、これに代つて新らしい他の理事が選任されてゐる。常任理事の中から一人の専任幹事が選ばれて之がこの會の常任理事は勿論あらゆる方面への通信を司る。従つて専任幹事の居る大學がこの會の本部を形成してゐると言つても差支がない。ジュネーヴに於ける第二回大會後此の學會の組織に多少の變更を來し、常任理事の外に巴里のメイエ教授を會長、ネーメーヘン大學のスレーネン教授を専任幹事とし、二十一人より成る特別調査委員會なるものが設けられた。即ち La Commission d'Enquête Linguistique (CEL) である。常任理事會は指導的立場に在つて専ら會の事業を指導するものであり、調査委員會は之に附隨して會の實質的活動を司るものである。即ち言語に関する特殊の調査研究を行ふ外に夫々の國に於ける言語の調査研究状態などを報告する任務を擔當してゐる。

學會としての組織の内容は以上の如くであるが大會は約一週間の會期を以て滿二年置きに開かれ、大會の公用語は英佛獨伊の四ヶ國語となつてゐる。常任理事會の決議によつて次回大會の開催地として選ばれた國の負擔は極めて輕少で大體二千圓を限度として大會費を準備するのが殆ど内規となつて居る。尤も大會に出席する會員に對しては其都度二十圓内外同伴者に對しては其約半額を徵集する例になつてゐる。是は出来るだけ經費を輕減することに依り、此の會の永續を企圖するもので、これ以外に會員として徵集される會

費は少しも無い。要するに言語學の研究其他言語に関する研究にいそしむ學徒が其研究の結果を大會に於て發表し一般言語研究に貢獻し併せて意志の疎通を計ることによつて國際親善を増進し且人類の福祉を増進するといふのが此の學會の主要なる目的といつて差支へない。

常任理事會は各大會に先立ち其大會に於ける主要なる討議事項について意見の交換を行ひ其決議を大會主催地側に傳達して夫々の大會の特徴を附與するのである。主催國に選ばれた國に於ては其大會を有意義に且つ盛大ならしむる爲め學界の總動員を行ひ朝野を舉げて舉國的努力を拂つてゐる。さうして大會に對する準備としては色々の組織委員・進行委員・接待委員・記録委員・通信委員・會計委員等凡そ大會に必要な準備を完成し常任理事會の決議に基いた提案に従つて大會に於て討議すべき主要事項につき豫め會員に移牒し大會に先立つ六ヶ月前迄に其等の問題に関する會員の意見を徴しそれを取捨選擇して討議事項を決するのである。其場合に於ける會員の意見の發表はタイプライターで書いた原稿六十頁を超えないといふのが常則になつてゐる。そして夫々の發表は大會の後に出版さるべき報告書に載せるのが常である。

又大會に於て特殊の研究發表を行はんとする者は豫め二十頁より四十頁までのタイプした原稿の要綱を作り前と同様大會前約六ヶ月以内に主催國側の當事者に送附することを例としてゐる。是等の研究は其性質内容により大會の總會に於て或は部會に於て發表することを許されるのであつて孰れにしても大會後一年内外に發表するを常則とする大會の報告書に載せられるのである。

總會に於ては多く常任理事會と主催國側の會議によりて決定して討議事項並に各部會に於て發表された研究事項の或物に就ての研究討議が行はれ部會に於ては特殊の研究發表が行はれる譯である。

今日迄に開かれた大會の行事を見るに、總會並に部會に於て議せられた問題は、大略下の三點に歸する。即ち一般言語の問題、印度歐羅巴語に関する問題、非印度歐羅巴語に関する問題であるが、之を更に具體的に述べるならば、ジュネーヴ大會(一九三一年七月)に於ては、言語研究機關の組織、發音記號の

- N. Jakovlev, Moscou.
 B. Karlgren, Göteborg.
 H. Labouret, Paris.
 D. Lorimer, Londres.
 Carl. Meinhof, Hambourg.
 K. Th. Preuss, Berlin
 P. Rivet, Paris.
 Ph. van Ronkel, Leyde.
 W. Schmidt, Vienne.
 A. Sommerfelt, Oslo.
 K. Vazny, Bratislava.
 T. Chiba, Tokyo. (Membre Correspondant)
 L. Grootaers, Louvain. (Membre Correspondant)
 S. Puscariu, Cluj. (Membre Correspondant)
 Tesnières, Strasbourg. (Membre Correspondant)

(Membre Correspondant とは遠隔の地に居住し幹事會並びに調査委員會
 に出席困難なるがため通信によつて意見を發表する役員を謂ふ) (1938, 8, 5)

[千 葉 勉]

第三回國際音聲學大會

第三回國際音聲學大會 (Third International Congress of Phonetic Sciences) は、今年 (1938 年) 七月十八日から廿二日迄、ベルギーのガン (Ghent) 市に於て開催せられた筈である。今回の大會の議長であるガン大學のプランケール教授 (Prof. E. Blancqaert) の名を以て東京帝國大學總長宛に發せられた趣意書によると、今回の議題は次の三である。

(1) 放送事業に關聯して生ずる言語學上の問題。此の問題に對しては既にロンドンに於ける大會の際にロイド・ジェームズ教授 (Prof. Lloyd James) が注意を喚起してゐるのであるが、今度の大會ではこれに特殊な重要性が與へられてゐる。放送事業の各國語の發達に及ぼす影響、放送用語の改良、更に技術的な諸問題に就いて出来る丈廣範圍に互つて論議せられる。

(2) 種々な種族の(特に Armenoid, Hottentot, 及び Caffer 族の)聲音間に存する人類學的相違に就て。ファン・ギネケン教授 (Prof. van Ginneken) が人類の最古の聲音間に存する相關々係に就いての論文を朗讀する。

(3) 音聲學の種々の新しい方法や術語に關聯して言語學、生理學、病理學、教育學、心理學、音響學の立場から教示が與へられる。

因みに國際音聲學大會常任評議員は次の人々である。

Prof. J. van Ginneken (Nymegen) (Chairman), Dr. K. Ph. Bernet Kempers (Amsterdam), Prof. S. K. Chatterji (Calcutta), Prof. Marcel Cohen (Paris), Prof. Pierre Fouché (Paris), Prof. Daniel Jones (London), Prof. J. P. Kleiweg de Zwaan (Amsterdam), Prof. A. Sommerfelt (Oslo), Prof. R. H. Stetson (Ohio), Prof. Prince N. Trubetzkoy (Vienna), Prof. D. Westerman (Berlin), Dr. E. Zwirner (Berlin), Dr. L. Kaiser (Amsterdam) (Hon. Secretary).

日 本 言 語 學 會 會 報

昭和十三年二月二十七日午後七時より東京神田學士會館に於て發起人會を開き、八杉貞利氏を座長として審議をすゝめ、本會の設立を決議し、會則を作成し、新村出氏を會長に推舉して散會。會合者三十名。

新村氏の會長就任受諾と共に、副會長小倉進平氏以下十六名の評議員及び五名の幹事を決定。

四月二十五日會長・副會長・十一名の評議員及び二名の幹事出席して、第一回評議員會を東京學士會館に開き、會則の細目を修正し、會計擔當(評議員中の一名)・雜誌編輯擔當(評議員中の若干名)の依囑、及び創立大會を五月二十八日に開催することを決議して散會。

五月二十八日午後一時半より東京帝國大學法文經第三十六番教室に於て創立大會を開催。聽衆約三百名に及び盛會であつた。會は新村會長の開會の辭に始まり、神保評議員の經過報告の後、福島直四郎(言語學と文献學)、柳田國男(鴨と哉)、白鳥庫吉(寺及び佛の語源)の三氏の講演があり⁽¹⁾、ついで

小倉副會長が閉會の辭を述べて散會。引きつづいて東大山上會議所に於て晚餐會を開き、會するもの三十八名。デザートコースに入つて會長、八杉貞利氏、辰野隆氏その他數氏のテーブルスピーチがあり、和氣霽々裡に午後九時散會した。

六月十一日學士會館にて午後七時より第二回評議員會を開き、三省堂に雜誌の發行を依頼することに決定。同書店出版部の人とも相談の上散會。雜誌は「言語研究」と名づけ、年三回(各冊約百二十頁發行)することに決定した。

その後は三省堂との直接交渉により、雜誌の體裁その他を相談し、六月中旬より執筆者を依頼し、八月中に原稿を集めることに努力した。

雜誌第一號は今こゝに讀者諸君の見られる様なものであつて、多言を要すまい。ついで第二號以下を發行するにあたり、かかる種類の雜誌はその繼續が甚だ困難なものであるから會員及び讀者諸氏の御後援を切にお願ひする次第である。

(1) 福島・柳田兩氏の論文は本誌に見られる通りである。白鳥氏は「寺及び佛の語源」の演題のもとに、先づ「寺」を朝鮮語の *tyel* より、ツングース語・蒙古語 (*tai*) と結びつけ、更に匈奴の「𡇗」、トルコの (*tai*) に溯つて説明し、次に「佛」は朝鮮語の *putho* 後漢書に出る浮屠、魏樂の復豆、更に Buddha, Buthe と關係づけて語源を明らかにされ、かくて非常に興味あり有益なる御講演を終つた。

尙は役員の名は下記の通りである。

日本言語學會會長	京都帝國大學名譽教授	新 村 出
同 副會長	東京帝國大學教授	小 倉 進 平
(以下五十音順)		
日本言語學會評議員	東京帝國大學教授	市 河 三 喜
同	帝國女子專門學校教授	伊 波 普 猷
同	京都帝國大學教授	落 合 太 郎
同	東京帝國大學助教授	金 田 一 京 助
同	東北帝國大學助教授	小 林 淳 男

同	東京文理科大學教授	神 保 格
同	京都帝國大學教授	田 中 秀 央
同	東京外國語學校教授	千 葉 勉
同	學習院教授	東 條 操
同	慶應義塾大學教授	西 脇 順 三 郎
同	(會計據當) 東京帝國大學教授	橋 本 進 吉
同	東京帝國大學助教授	福 島 直 四 郎
同	東京文理科大學教授	保 科 孝 一
同	慶應義塾大學教授	松 本 信 廣
同	東京外國語學校名譽教授	八 杉 貞 利
同	元東北帝國大學教授	山 田 孝 雄
同	日本語學會幹事	高 津 春 繁
同		木 村 彰 一
同		小 林 智 賀 平
同		八 木 龜 太 郎
同		井 筒 俊 彦

寄 贈 圖 書

(書 名)	(寄 贈 者)
言語地理學(ドーザ著・松原秀治譯)	
東京・富山房・昭和 13 年	譯 者
日選會話便覽(泉虎一著)	
暹羅海軍宿舍・昭和 13 年	著 者
地名抄(阿瀬利吉著)	橫濱・昭和 12 年
	著 者
英語學研究 (第二十・二十一輯)	齋 藤 靜 氏
同 (第二十二・二十三輯)	同
同 (第二十四輯)	同
獨逸文學 (第二年・第三輯)	東京帝國大學獨逸文學會
漢字の科學(水谷碧雲著)	
(汎交通第三十九卷第三號拔萃)	著 者

會計報告 (九月三十日現在)

		圓
收 入	基本金寄附金及ビ銀行利子	1525.96
	會費收入	153.00
	郵便貯金ニテ	153.00
	振替貯金ニテ	369.00
	現金ニテ	55.00
	創立大會晚餐會費殘金	4.30
	計	2107.26
支 出	印刷代	70.80
	切手代	28.83
	振替申込金	10.00
	創立大會講師謝禮	30.00
	第二回評議員會費用	8.45
	振替用紙代	6.00
	雜費	32.01
	計	186.09
差引殘高		1921.17
但内譯	銀行預金	1389.92
	郵便貯金	138.00
	振替貯金	363.00
	現金	30.25

會計擔當 評議員 橋 本 進 吉 ㊦
 幹 事 高 津 春 繁 ㊦
 幹 事 木 村 彰 一 ㊦

文藝の日本的形態

大熊信行著

フールス判・232頁・函入
定價 一圓五十錢 送料 .10

戀愛・映畫・新聞小説、新聞文學の存在形式、新聞小説家としての夏目漱石、文學に於ける讀者の問題、美と經濟學の動機、日本作家の小説と生活等凡ゆる角度から把握された文學的諸問題の中特に新聞小説の連載形態に独自の焦點が合され、茲に、現代日本文學にとり最も重要なる問題となりつゝある「日本的なもの」の探求に偉大なる道標を與へられてゐる。我々日本人個有の文學とは何であつたか？ 文學を愛するもの、文學を語るもの、齊しく本書の裡にその貴重なる標示を得られるであらう。

おのづから 佐野一彦著

單に思想の徑のみを辿らず、おのれの氣持を偽らず飾らず書き誌すことによつて到達した著者の日本愛好の境地。一讀深き共感にさそはれる珠玉の如き隨筆集である。

フールス判・200頁 一圓八十錢 送料 .10

三省堂刊行

編輯後記 第一號の發行が甚だ遅くなつて申譯ありません。種々の新しい活字の鑄造と五校に及ぶ校正の必要とのため、思ひの外時間を取られたのです。第二號以下は出来る限り豫定通りに出す様に努力致しますから、會員諸氏もこの點御諒察下さる様お願い致します。

昭和十四年一月二十日印刷
昭和十四年一月二十五日發行

言語研究 第一號

編輯者 東京市本郷區西片町十番地ほノ三號
小倉進平
發行者 東京市神田區神保町一ノ一
株式會社 三省堂
代表者 龜井登治
印刷者 東京市蒲田區仲大橋一ノ五
株式會社 三省堂蒲田工場
代表者 喜多見昇

定價金 1圓20錢

發行所 株式會社 三省堂

本社 東京市神田區神保町一ノ一
振替東京三一五五五

支店 大阪市西區阿波座下通二ノ六
振替大阪八一三〇〇

編集後記

この『言語研究』別冊「日本言語学会 50 年の歩み」は、日本言語学会設立 50 周年を記念して特に編纂されたもので、顧問・評議員の先生方のエッセイを中心に作成されています（御都合により御原稿を頂けなかった先生もいらっしゃいます）。1988 年 10 月 22 日（土）、23 日（日）に神戸市外国語大学で開催された、学会設立 50 周年記念大会における記念式典（22 日）での祝辞も含まれています。これらは、学会初期の証言として、あるいは将来への提言として、25 年後あるいは 50 年後には貴重な資料になると思います。外国からの祝辞は、国際言語学者会議常置委員会（Comité International Permanent des Linguistes）の方々を中心にお願ひしました。学会略年譜（1938-1988）と創刊号抜粋リプリント作成のために、東京大学文学部言語学研究室の『言語研究』バックナンバーを利用させていただきました。（下宮忠雄）

言語研究 別冊

日本言語学会設立 50 周年記念

1988 年 12 月 20 日 印刷

1988 年 12 月 25 日 発行

編集・発行 日本言語学会
会長 小泉保

事務局：〒101 東京都千代田区三崎町 2-22-14 (株)三省堂出版局内
電話 03-230-9526

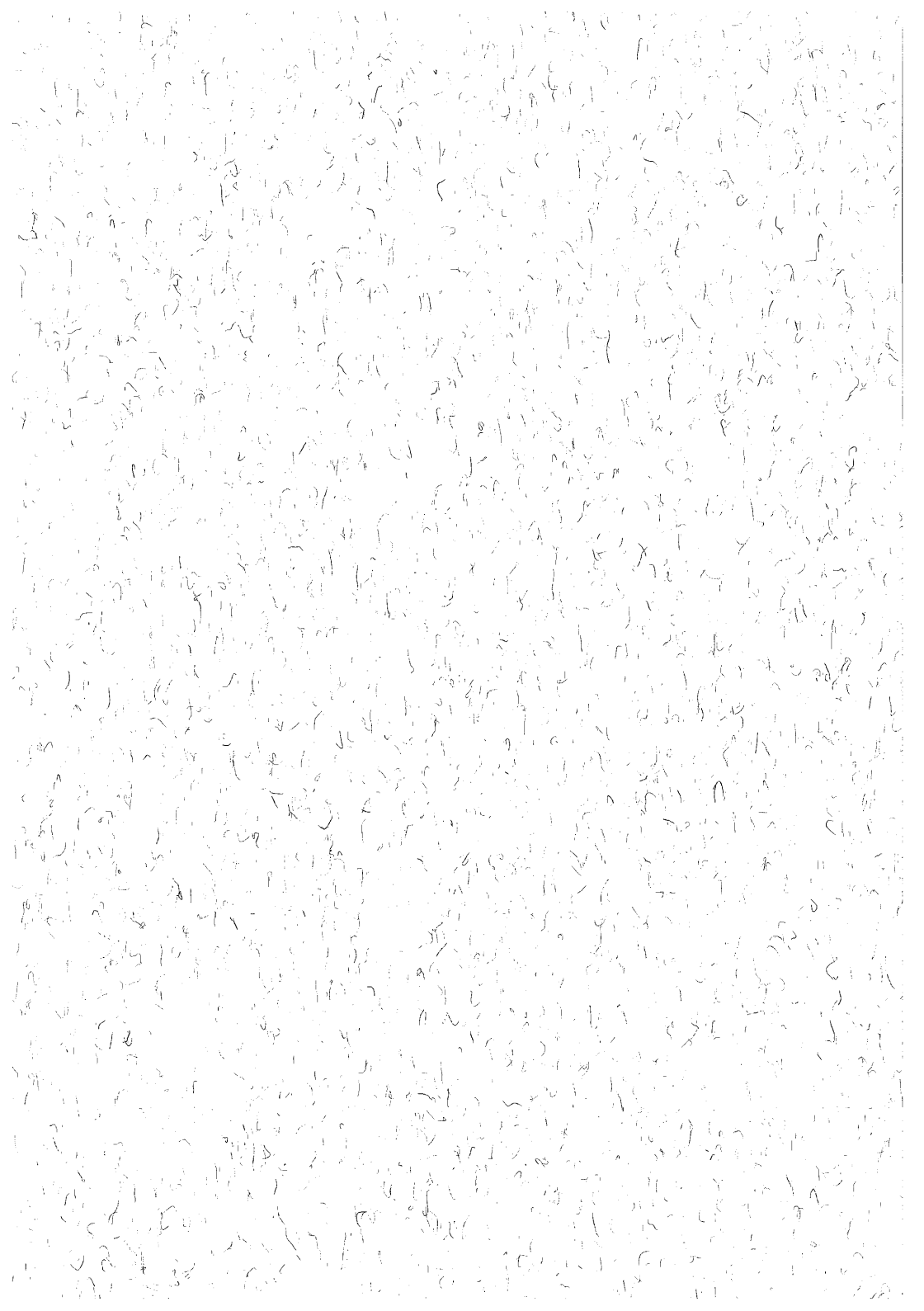
発売 株式会社 三省堂
〒101 東京都千代田区三崎町 2-22-14

印刷・製本：三省堂印刷株式会社

バックナンバー取扱所：株式会社 三省堂書店

〒101 東京都千代田区神田神保町 1-19

ポニービル 3 階 電話 03-291-9456



GENGO KENKYU

Journal of the Linguistic Society of Japan

Special Issue to Commemorate the 50th Anniversary
of the Founding of the Linguistic Society of Japan

December, 1988

CONTENTS

List of Presidents (1938 - 1988)	2
Preface	Tamotsu KOIZUMI 3
Congratulatory Addresses :	
Shirô HATTORI	6
Teruo HIRAYAMA	9
Essays :	
Jiro IKEGAMI	14
Kazuko INOUE	16
Yuriko OHTSUKA	18
Takashi KAMEI	21
Haruhiko KINDAICHI	23
Tetsuya KUNIHIRO	24
Minoru GOH	27
Tadahisa GOTO	31
Congratulatory Addresses from Abroad :	
Werner BAHNER	55
Wolfgang U. DRESSLER	56
Thomas V. GAMKRELIDZE	57
Einar HAUGEN	58
Hiroshi TSUKISHIMA	12
Kinsuke HASEGAWA	13
Takesi SIBATA	33
Itaru SEKIMOTO	35
Yasumoto TOKUNAGA	37
Soichi NOGAMI	39
Matsuji HASEGAWA	43
Shichiro MURAYAMA (with a letter from G. J. Ramstedt)	45
Yosio YOSIMATI	52
André MARTINET	60
R. H. ROBINS	61
E. M. UHLENBECK	62
Brief History (1938 - 1988) of the Linguistic Society of Japan	Tadao SHIMOMIYA 63
Extract Reprint from the first number of <i>Gengo Kenkyu</i> (1939)	76

Published by

THE LINGUISTIC SOCIETY OF JAPAN

Address : c/o The Sanseido Co., Ltd.

2-22-14, Misaki-cho, Chiyoda-ku,

Tokyo, 101. Japan